

---

# ライバルは中学生！？

奈津美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ライバルは中学生！？

### 【Nコード】

N 8 6 3 2 A

### 【作者名】

奈津美

### 【あらすじ】

この話はコナンと哀が元の姿に戻った後の話です。ある日、中学生の女の子に新一がファーストキスを！？蘭は許せなくて・・・。

## #1 「いきなりのキス」(前書き)

この話は、新一×蘭です。

灰原哀は宮野志保として出てきます。

## #1 「いきなりのキス」

私達はずっと仲良くやっていけるよ。

だって、ずっと一緒だったじゃない。

「新一！早くしなきゃ遅刻しちゃうよー!!」

「うっせーなあ、今行くからよお。」

「まったく・・・。」

私の名前は毛利蘭 新一の幼なじみ

新一は、東の高校生探偵工藤新一で有名人。

だから、新一の郵便受けはいつもいつも

「出た、ラブレター。」

ガチャ

「おい、蘭。見てんじゃねーよ!!」

「新一!!だって気になるじゃない。」

「へいへい。」

「……………あのお。」

後ろから声がした

「こんにちは！私、佐々岡結奈って言います！！」

「えーとお……。俺になんか用かな？」

その子の制服は帝丹中学校の制服だった。

「しゃがんでください。」

「いいよ。」

新一がしゃがんだ時

チュッ

（えっ……。）

その子はいきなり新一にキスをした。

## #1 「いきなりのキス」(後書き)

ちよつと展開が急な気がします。。

感想オネガイしますm(。。)m

初めての連載です。

文章も未熟ですがよろしくお願いします。

## #2 「蘭の思い」(前書き)

#1で、高校名を間違えたことお詫びします

すいませんでした！

## #2 「蘭の思い」

私の目の前で、その子は新一とキスをしたの。

新一は目を丸くして驚いた

「新一さん、私を覚えてないんですかあ？」

「えっ……。」「

（なにが覚えてないんですかあ？よ！！小さい「あ」とかつけちゃつて！！）

「ああ！佐々岡さん家の！！」

「新一、知ってるの??」

「この前の事件でちよつとな。」

「ふん。」

「新一さんと話せなくて・・・結奈ね、後悔したんだよ！」

（あわわわ、自分を名前で言うタイプ！！）

私はその子が気にいらなかった。

新一のファーストキスを奪つたという！



許さないんだから!!

「結奈、新一さんに一目惚れしちゃいましたあ。」

「はぁ!!!!」

なにが一目惚れよ!!

「新一、早く行かなきゃ遅刻しちゃうよ!」

「ああ。」

私達は急いで学校に向かったの

「・・・あのおばさん、結奈にとって邪魔者かもあ。」

〔帝丹高校〕

「おはよう園子。」

「蘭、なんか怒ってない?」

怒ってるにきまつてるじゃない!

園子に教えたほうがいいのかなあ。

「実はね、園子・・・。」

説明中・・・

「で、その結奈とかいう子が新一君のファーストキスを奪ったのね。」

「うん。」

「その子は蘭と新一君が夫婦ってこと知らないの？」

「うん・・・って夫婦じゃないよぉ！」

あの子・・・可愛かったなあ。

目がぱっちりしてて、パーマがかった茶色の髪の毛

「ちょっと行ってくるね。」

「どこ行くの？園子？？」

「ちょっとねっ。」

園子はどっか行っちゃった。

「はぁ。」

私、どうしたらいいんだろう。。。

## #2 「蘭の思い」(後書き)

佐々岡結奈は「ささおかゆいな」と読みます。  
オリジナルキャラです。

中二の14歳って設定です。

### #3 「決闘!？」（前書き）

えーと、あとどれくらい続くか分かりませんが・・・。

新一と蘭の応援オネガイします。

### #3 「決闘!？」

〈廊下〉

「ちよつと、新一君！」

園子は新一に話しかけた。

「なんだよお園子かあ。」

「ちよつと話があるんだけど。」

「ええゝあとでな。」

新一君ったら、私の話を聞きなさいよ！

よし、この手を使おう！

「新一君、耳貸して！」

「ああ、分かったよ。」

私は新一君の耳元で小さく言った

（蘭のことなんだけど・・・。）

「分かった、屋上で聞いてやるよ。」

新一君はこう言々と大抵OKなのよねえ

この鈴木園子をなめちゃいけないのよお。

オーホッホッホッオーホッホッホッ

（つたく、園子は大抵ああ言うからなあ・・・。）

俺はしょうがなく園子についてった

く屋上く

空は綺麗な水色だった。

俺、なんで園子に弱いんだよお・・・。

「なんだよ園子。」

「新一君、今日ファーストキスだったんだって？」

「うつ・・・。」

蘭のやつ・・・話しやがったな！！

いや、園子がムリヤリ聞き出したって可能性もあるぞっ！！

「ああ、けどムリヤリだぜ！だって俺！」

「俺は蘭とキスしたかったんだっ！でしょ？」

「おい園子！！！」

「蘭、元気がないのよねえ・・・。」

蘭の目の前であんなことあったからなあ・・・。

「けど、ある意味チャンスよ!」

「はあ? チャンス??」

「そうよ、チャンスよ!!」

結奈ちゃんを使わせてもらっわよ!

名づけて「新一&蘭! 恋の難関を乗り越えよ大作戦!!」

「頑張りましょうね、新一君。」

「は・・・はあ。」

俺、こいつを信じていいのだろうか・・・。

（放課後）

「新一、帰ろっ。」

「ああ。」

「ビュービュー 今日も二人で下校ですかあ。」

「うっせーよ。」

新一はどう思っているのかな・・・。

あのキスのこと・・・。

「ねえ、新一・・・聞いてもいいかな？」

「ああ、いいけど。」

「結奈ちゃんのこと・・・なんだけど。」

「えっ！」

（どうしよう・・・。）

「あのさあ蘭、俺さあ結奈ちゃんのことなんとも思っていないから。」

「そっかあ。」

「えっ？」

「よかった。」

蘭が笑った時俺は安心した。

「どうもっ。」

「えっ??？」

「こんにちはっ 新一さん、蘭さん。」



「結奈ちゃん・・・。」

どうしてこんな時にくるんだよ!!

タイミング悪すぎだろっ!

「蘭さん、あなたに決闘を申し込みます!」

「はあ??」

「結奈にとってあなたはライバルなの!!」

あーあー結奈ちゃんは知らないんだよなあ

蘭が空手の達人ってことを・・・

「私と決闘・・・いいけど?」

「蘭さん、結奈それでも空手やってるの。」

「えっ!!」

「都大会優勝しましたからあ。」

つまり・・・高校生都大会チャンピオンと中学生都大会チャンピオンの決闘?

うわぁ・・・俺でも勝てないかも・・・

「私、負けないわよ。」

蘭もやる気だなあ。

「じゃあね、新一さん」

これから怖いことになりそうだ……。

「新一、私絶対勝ってみせるからねっ！」

私が新一を守ってあげなきゃ！

「が・・頑張れよ蘭。」

空には綺麗な夕焼け

下にはありの行列

横には自信に満ち溢れた蘭

後ろには俺に手を振る結奈ちゃん

俺の心は複雑だ……。

「そうそう、新一明日は早起きしてねっ。」

「なんでだよ。」

「空手の練習よお！新一のためなんだからね。」

「そりゃどーも。」

蘭は練習しなくたって勝てるだろ・・・。

「じゃーね、新一。」

「じゃあな、蘭。」

俺は今日の夜、目覚ましを6：00にセットした。

ゆっくり寝ようと思ったのに・・・。

こーいう時に限って眠れないんだよなあ・・・。

園子はなんかたくらんでるし・・・。

結奈ちゃんは空手の達人らしいし・・・。

俺はどうしたらいいんだよっ！

く蘭の家く

「新一、結奈ちゃんのことなんにも思っていないんだよね。」

新一・・・起きてるかなあ。

「蘭、まだ起きてたのか？」

「お父さん！」

「ほぉ、きれいな星空だなあ。」

まるで空に散りばめられた宝石みたい。

「本当だぁ・・・。」

「こんな夜にはビールをもう一杯！」

「お父さん！お酒はもうだめっ！」

### #3 「決闘!？」（後書き）

結奈も空手をやってるといふ設定はよかったのかな？

結奈はぶりっこなのに空手・・・？（笑

次回！あの色黒探偵が・・・。

#### #4 「登校前のお客様」(前書き)

今回はあの色黒探偵と彼女？が出ますよ。

## #4 「登校前のお客様」

朝日が出た頃、目覚まし時計の音がなり響く

עג עג עג עג עג עג עג עג

「ねみい・・・。」

עֲדָה עֲדָה עֲדָה עֲדָה עֲדָה עֲדָה עֲדָה עֲדָה עֲדָה עֲדָה

「もう少し……。」

”ピンポーン”

はっ！！蘭のやつこんな早くに来たのか！？

”ピンポンピンポンピンポン”

だー！うっせえーなああ！

「ちよつとまってくれよ！」

俺は急いで顔洗ってはみがきして制服に着替えた

”ピンポンピンポンピンポン”

しつじいぞう！！

「はいはいはいはいはい。」

ガチャ

「えっ……。」

「あら、工藤君起きてたのね。」

「宮野！」

訪問者は宮野志保だった。

「あなたにお客さんが来てるんだけど？」

「客？？」

「いつとくけど、彼女じゃないわよ。」

「はいはい。」

こいつの話し方って相変わらずツンツンしてるよなあ……。

「……かわいくないやつ。」

「あら工藤君なにか言ったかしら？」

げっ……こいつの耳は地獄耳かよ。

「なんでもありません。」

俺達はとりあえず博士の家に行った。



「博士ー、誰だよ客って!」

「く・ど・う!」

ん・・・この声は・・・。

そう、この話し方この声はあいつしかない・・・。

「服部・・・。」

服部平次・・・と

「ごめんなあ、工藤君。平次がどうしても遊びに行くって言っから。」

遠山和葉だ。

「いや、いいけど学校は?」

「ああ、今日は休みなんや。」

「休み??」

「あのなあ、今日は学校の創立記念日なんよあ。」

「そっか、じゃあ俺ん家来いよ。」

「いいのお?」

「和葉ちゃんはね。」

「おい、工藤！なんで俺はアカンのや！！」

「平次がいけないんよお、工藤君に連絡なしにきたんやからあ。」

「つたく・・・来るなら来るって言えよな・・・。」

「うつさい和葉は黙るとき！俺は工藤と話してんや！！」

「うつさいとはなんや！このアホ！！」

「分かった、服部も来いよ。」

「じゃあ、工藤君お願いね。」

「はいはい、じゃあな。」

「工藤君、おれいくらいしたらどう？」

「どうもありがとうございました。これでいいか？」

「フサエブランドの限定品・・・。」

「そんな金ねーよ！」

あたりはもうすっかり明るくなっていた。

「新一の家」

「そーいえば服部。」

「ん？」

「朝食べてきたのか??」

「いや、食べてへんけど。」

「はあ?平次食べてへんの??」

「工藤の家で食べりゃいいと思ったんやけど・・・。」

「アホ!!どんだけ迷惑かけたら気ー済むんや!」

またケンカかよ・・・。

「そやったら朝食べた?とかいうとけボケエ!!」

服部のいうことめちやくちゃじゃねーか・・・。

「ちょっと待ってる。」

俺はしょうがないから朝食を作ってやった。

「服部、目玉焼きには醤油でいいか?」

「はっ?目玉焼きには塩やろ?」

「なにいつてんのぉ!ソースに決まってるやろ?」

またケンカかよ！　たく付き合ってらんねーぜ

「ほらよっ。」

俺はテーブルに塩とソースと醤油を置いた

「つたく・好きなのかけるよ。」

「サンキュ。」

”ピンポンピンポン”

「あつ、蘭だ。」

「うそっ！　蘭ちゃん？　会いたかったんよぉ。」

和葉ちゃんは急いでドアを開けた

「えっ、和葉ちゃん！」

「蘭ちゃん！」

「なあ、工藤。」

「なんだよ。」

「あのねえちゃん怖いなぁ。」

「あ？　宮野のことか？」

「なんかツンツンしててかわいくないやっちゃ。」

「アハハハハ・・・。」

とりあえず俺は学校に行く準備をして家を出た。

#### #4 「登校前のお客様」(後書き)

えーと、私は埼玉県人なので・・・。

大阪弁がさっぱりでして、勘で書きました^^;

すいませんm(\_\_\_\_\_)m

次回は結奈と蘭がショッピング!?

#5 「今日は蘭で明日は園子!？」 (前書き)

題名の意味は本文読めばだいたい分かるかと。  
長い題名ですいません。

#5 「今日は蘭で明日は園子!?!」

辺りはすっかり明るい

俺はすっごく眠い

「ふぁゝあ」

「やだ新一すっごいあくびね。」

しょうがないだろ!

6:00に起きた上に服部たちが来てるんだから。

「今日学校早く終るよね。」

「へっ?そうなの?」

「なに言ってるの?今日は高校説明会で学校使ってから2:00には帰れるよ。」

「へえゝ。」

昨日の先生の話聞いてなかったもんな

「どこか・・・行かない?」

「えっ?」



蘭とどこか・・・？

「それって、デートか？」

「ばか！なにいつてんの！」

けど家に服部達いるしなあ・・・。

服部がなにしでかすか分かんないしなあ・・・。

「おはようございますっ！」

この声・・・。

「結奈ちゃん・・・。」

「今日は蘭さんにお話があつてえ、来ましたあ。」

「えっ？私？」

珍しいこともあるんだなあ・・・。

いきなり空手のとつくみあいとかしないよなあ・・・？

俺はちょっと不安だった。

「ショッピングに行きませんか？」

「えっ？？」

「決闘のこと忘れて行きましょうよ。」

ちよつと待て！

蘭と結奈ちゃんがショッピングに行ったら俺一人じゃん！

「ごめんね、結奈ちゃん。今日はちよつと・・・。」

「今日？そつかあ、結奈明日って言ってなかったんだあ。」

明日行くのか・・・ならいいけど

「明日ならいいわよ。」

「じゃあ、明日の10:00に新一さんの家の前で待ち合わせ！」

なんで俺の家の前なんだよ・・・

「じゃあ、さようならあゝ。」

結奈ちゃんは走って学校に向かった。

「蘭、いいのか？」

「うーん・・・まあ結奈ちゃんのこと知りたいしね。」

もの凄く不安なんですけどお・・・。

～学校～

「じゃあ、新一。私空手の練習あるから。」

「ああ、分かったよ。」

学校は静かだった。

朝練は7：40からだかなあ・・・。

まだ7：20だし。

蘭のどこにでも行くかあ・・・。

俺は体育館に行こうとした。

「新一君！どうしたのこんな朝早くに。」

「なんだ園子かあ。」

「なんだじゃないわよ、それより蘭は？」

「練習中。」

「ああ、決闘のお。」

「なんで知ってたんだ??」

「昨日蘭から電話があったのよ。」

「へえ〜。」

蘭のやつ園子に話したのか。

「でさ、明日どっか行かない??」

「へっ?」

「いろいろと話したいからっ。」

明日は蘭もいないし・・・。

家には服部と和葉ちゃんがいるし・・・。

「んー・・・。」

「大丈夫、蘭から許可取るからさっ。」

「分かったよ・・・。」

ムリヤリだったよーな・・・。

まっいつか。

「そろそろ朝練ね、新一君サッカー部の朝練は?」

「やべっ!じゃあな園子!!」

俺は急いで部室に向かった。

「はあー、しょうがないわねえ。二人のために一肌脱ぎますか!」

新一君、明日は園子のラブラブ作戦をたくさん覚えてもらおうよ！

#5 「今日は蘭で明日は園子!？」（後書き）

新一「まったく俺がどれだけ疲れたか・・・。」

作者「・・・・・・。」

新一「おいおい!」

作者「次回は服部と和葉の話。」

新一「おいおい、放課後のデートは?」

作者「後回し。」

新一「はあ!? そんなあゝ。」

作者「ではでは最後に決め台詞。」

新&作「真実はいつもひとつ!」

## #6 「Wデート!？」（前書き）

えーと、読みにくいかもしれませんが  
どうぞよろしくお願いします。

## #6 「Wデート!？」

「新一の家」

「ほお、こりやえらい数の本やなあ。」

「工藤君のお父ちゃん作家やからねえ。」

俺と和葉は工藤の許可なしに家の中を探検してる。

「見て平次、工藤君の机やよ。」

「おっ！和葉引き出し空けてみい！」

「なんよ命令なんかしてえ！」

和葉は引き出しを空けた。

「ん？なんやこれ？」

「これアルバムとちゃう？」

引き出しの中には一冊のアルバム

「はよー中見せんかい。」

「なんよえらっそーに。」

和葉はぶすつとしながらアルバムを開けたんや。



「うわぁ・・・蘭ちゃんと工藤君めっちゃかわいい。」

「ほとんど二人の写真やな。」

開いた二ページ全部二人の写真やった。

「このころから二人は仲良かったんやね。」

「そやなあ。」

「あの二人なんで付き合わへんのやろか。」

「工藤がいけないのとちゃうか？」

「あんたもな。」

そう言って和葉は別の部屋に行ってしまった。

「おい、まてや和葉！」

「待ちませんー。」

「ん？」

「平次どうしたん？」

「見ろやこれ。」

平次が両手に持ったラブレターは10通ほどだった。

「それって工藤君の？」

「あいつ・・・ねえちゃんがおるっちゅーのに。」

「しゃーないやん、捨てるよりましやと思うよ。」

「なあ、和葉。」

「ん？」

「これ見ろや・・・。」

平次は和葉に新一のラブレターを手渡した

「中、見てみい。」

「分かった。」

文章の内容はとてもひどいものだった

「なんやこれ!!」

「死んでくれませんか？」なんてラブレターやないやろ。」

「工藤君が帰ってきたら知らせなーあかね。」

「そやな。」

なんでやろ・・・。

やな予感がすんのや。

工藤とねえちゃんになにかあったんか？

「学校」

「新一、今日トロピカルランド行こうよ。」

「いいぜ、じゃあ2：30に・・・どこがいい？」

「私が新一の家に行くよ。」

「分かった。」

「あーお暑いですねえ。」

「園子!!」

うつせーよ・・・ったく園子のやるー。

「京極さんとはどうなの？」

「そりゃあもうラブラブよお、昨日なんてねー。」

のろけ話かよ・・・。

トロピカルランドかあ。

結構楽しくなりそうだ。

「ねえねえ、新一。」

「なんだよ。」

「服部君と和葉ちゃんも一緒に連れてこよう！」

「えっ！！」

二人つきりじゃねーのかよ！

まあ、あの二人の仲を進展させるのも悪くないか。

「いいぜ、家帰ったら言つとくからよ。」

「ありがと、新一。」

ちょっと不安つてのが本音だ・・・。

まあ、Wデートってことでいいか！

俺と蘭は急ぎ足で歩いた。

早くトロピカルランドに行くために。

## #6 「Wデート!？」（後書き）

新一「おい、作者。」

作者「なに？」

新一「次回はなんだ？」

作者「次回は結奈と蘭のお話ですよ。」

新一「けんかせんなよ。」

作者「ほいほい。」

新一「みんな、感想よろしくなっ！」

作者「ではでは決め台詞！」

新&作「真実はいつもひとつ！」

## #7 「デート前のひととき」(前書き)

話の進み方が悪い気がします・・・。  
すいません。

## #7 「デート前のひととき」

新一と別れたあと心を弾ませながら歩く道。

いつもの帰り道じゃないみたい！

和葉ちゃんと服部くんとそして

新一とトロピカルランドに行けるんだもん！

「ただいま！」

「おつ、帰ってきたのか蘭。」

「うん。」

「今日の夕食なんだ？」

「ごめんお父さん、今日はポアロで食べてね！」

「はっ？おい蘭！」

「トロピカルランドに行くの、じゃあねお父さん。」

小五郎はポカーンと口をあける

「分かったよ、ったくそーならそーと早く言えよ。」

「ごめんごめん、じゃあ着替えるから。」

ガチャ

どの服がいいかなあ？

少しでもかわいく見て欲しいし……。

けど気合入れすぎて引かれちゃうかも！

どうしょお～～！！

く新一の家く

「えっ！トロピカルランドに行くのぉ？」

「ああ、蘭もくっからよ。」

服部は難しい顔をしている

「どした？服部？」

「ああ！あんなぁ工藤君、ラブレターの中に変なものがあったんや。」

「

「変なもの……？」

「和葉、後にしい、せっかく遊びに行くんやから。」

私は平次の顔があまりにも真剣やったから工藤君に言っのをやめたんや。



平次がかっこよかったってのもある。

「新一、用意できたあ〜？」

蘭ちゃんや、まだ着替えてないのにい。

「蘭ちゃん、ごめんなあ。まだ着替えて無いんや。」

「いいよ、待つから。」

私はどの服にしようか悩んだ。

平次・・・どうしたらかわいって言うてくれるやろ・・・。

「蘭ちゃん！」

「なに、和葉ちゃん。」

気がついたら玄関まで走ってた。

蘭ちゃんなら分かんと思ったんや。

どうしたら平次がかわいって言うてくれるか。

「うわあ・・・蘭ちゃんかわいい。」

デニムのジャケットにワンピース。

ほんのりピンクのチーク。

赤い口紅。

全部蘭ちゃんにぴったりで、私はうらやましかったんや。

「どうしたら、平次かわいって言うてくれるかなあ。」

「うーん・・・髪でもおろしたら？」

確かに私はずっとポニーテールやけど・・・かわいって言うてくれるかなあ。

「蘭ちゃん、私頑張る！」

「じゃあ、着替えてきたら？」

「うん！」

トップスにピンク、真っ白なふわふわスカート

髪をおろしてバレッタつけて

メイクをした。

「和葉ー、いくでえ。」

「待ってなあ、今行くう。」

私は走って玄関に向かった。

平次に見て欲しくって

「ごめんなあ、準備に時間かかてしまった。」

「和葉ちゃんかわいいよお！」

「ホンマ？蘭ちゃん。」

蘭ちゃんは頷いた。

「似合ってんじゃない。かわいいよ。」

工藤君もかわいって言うてくれた。

それなのに・・・。

「和葉、口に油ついてんで。」

「油？？」

平次はほめてくれなかった。

「服部君、それはリップよ！」

「リップ？？ほあ、和葉がリップ付けるとはなあ。」

平次は私に似合ってるとも言うてくれなかった。

「・・・・・・・・。」

言葉が出なかった。

「結構似合ってるで、和葉。」

「えっ……。」

平次は顔を真っ赤にしていた。

「じゃあ、行こうよ。」

私は嬉しくてたまらんかった。

「平次。」

「なんや和葉。」

「おおきに。」

「なんや気持ち悪いなあ。」

私はトロピカルランドに早く行きたくてたまらんかった。

「ねえ、新一。」

「ん？」

「なんか誰かに見られてたよ……。」

「気のせいだろ、早くいこーぜ。」

「うん・・・。」

俺達はトロピカルランドに急いで行った。

## #7 「デート前のひととき」(後書き)

新一「次回、とうとうWデートだなっ。」

作者「けど邪魔者もいますよ。」

新一「次回はどうなるんだ？」

作者「#8「後をつける中学生」ですよ。」

新一「おいおい・・・。」

作者「ではではお決まりの・・・。」

結奈「新一さんだーいすきww」

作&新「出てくんなよ!」

大阪弁って難しいですね・・・はうー。

## #8 「トロピカルランド到着！」（前書き）

ええと、#7で言ってたタイトルじゃなくなりました。  
すいません^^；

## #8 「トロピカルランド到着！」

新一さん、結奈はあなたが大好きなのに

どうしてパパを捕まえてしまったの？

教えてよ、新一さん

「トロピカルランド」

「じゃあさ、今3：00だから3：30まで全員行動で、3：30からは。」

「私は新一、和葉ちゃんは服部君とデートよね。」

「そういうこと。」

俺は蘭と作戦を立てたのだ。

服部と和葉ちゃんをくっつけてやるってな！

作戦1「服部と和葉ちゃんに手をつながせよう大作戦！」

「いいか、蘭。」

俺は小声で蘭に言った。

「OKよ、新一。」



作戦1、開始！

「なあ、あのジェットコースターに乗ろうぜ！」

「私、乗りたい！」

「おお、楽しそうやないか。」

「うん、めっちゃ乗りたい！」

和葉ちゃんはこーいうの平気なのかな？

少し怖がつてほしいんだけどなあ。

「新一、行こうよ。」

小声で蘭に伝える

「今だ蘭、俺の手を握れ！」

「うん。」

ギュッ

「ああ、行こっか。」

俺らは服部の方を見た。

「相変わらずラブラブやなあ、お二人さん。」

だー！！違っだろ！そこでお前も和葉ちゃんの手を握るんだよ！バ  
ーロー！

「いいなあ・・・。」

おっ、ナイス発言だぞっ和葉ちゃん！

そのころ・・・。

「もう、このジェットコースターすっごく並んでるじゃない。」

「結奈ちゃん、落ち着いてよ。」

「だって園子ちゃん！結奈待つの嫌いだもん！」

なんと結奈と園子もトロピカルランドに！？

どうしてかというと・・・。

（一時間前）

「パパ、お客さんって誰??」

「園子、こちらはあのローズブランドデザイナーの娘さんだよ。」

ローズブランドとはバラを基調としたフサエブランドの次に人気な  
ものだ。

「佐々岡結奈ですっ！よろしく、園子さん！」

結奈……どうかで聞いた名前ねえ……。

「あつ！新一君が好きな結奈ちゃん？」

「そうなんです。好きなんです。」

そーいえば・・・新一君トロピカルランドに行くのよねえ。

私も様子見たいしなあ・・。

「ねえ、結奈ちゃんトロピカルランドに行かない？」

「えっ？結奈とでいいんですか？」

「もちろん！」

あの作戦が実行されそうじゃない！

$$\begin{array}{c} \bar{1} \\ \bar{1} \\ \bar{1} \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \circ \end{array}$$

「あの、どうしてここにしたんですか？」

「それは秘密よ、結奈ちゃん。」

「まったく新一君のやつどにいのよ……！！」

「いた・・。」

新一君、蘭と手つないじやってやるじゃない。

あれ？服部君と和葉ちゃんもいるわねえ。

「ああ！新一さん！」

「まって、結奈ちゃん。」

まだ早いわ、もう少し後じゃないと・・・。

「なんで？園子さん？？」

「まだ早いよ、まだ。」

結奈ちゃん、耐えるのよっ！

「あつ、園子さん順番が来たよお。」

「ホントだ・・・よし！結奈ちゃん今日は乗りまくるわよっ！」

「はいっ！」

それにしてもこの子かわいいわねえ・・・。

新一君にはもったいないじゃない。

「つくしゅん！」

「どうしたの？新一？」

「誰かが俺のうわさしてんのかも・・・。」

「熱でもある？」

「平気だよ。」

それより服部、早く手をつなげて！

スッ

「キャアア！」

「どうした！和葉！！！」

#8 「トロピカルランド到着！」（後書き）

作者「今回は和葉がつー！」

新一「なんか、くしゃみが出るんだよ。」

作者「誰かがうわさしてんじゃない？」

新一「そうかあ？」

作者「ではいつもの決め台詞！」

新&作「真実はいつも一つ！」

#9 「人質は和葉！」（前書き）

大阪弁に変なところが・・・すみません。

#9 「人質は和葉！」

ねえ、平次

私のことどう思ってたんの？

私、分からへん。

もしなにかあつたら

平次に助けて欲しいんや。

「和葉！！」

「来るなあ！！」

「和葉ちゃん！」

「！！」

オタク風な男が和葉に抱きついたんや

なにやーとんのや和葉！

得意の合気道でバシッと！

「おっと、暴力はだめだよ君。」

男はポケットからナイフと取り出した



「っ！なにすんのや！触るな！キシヨく悪いでえ！」

長髪でボサボサ、バンダナ巻いて大きなリュック

まさにアキバってやつちゃ

なんか腹とおてしゃあない

むかつくんや

和葉に抱きつきおって

「お前、武術とかやっとなのか？」

「小生は剣道やってますよお。」

「じゃあ、剣道対決するのはどうや？」

剣道で負けへんで！

和葉、助けてやつから待ってるよ

「平次、私のことはいいから！」

ホントは助けて欲しいけど、平次に怪我して欲しくないんや

平次が危険な目におうのがいやなんや

「和葉。」

「なに・・・平次？」

「絶対助けてやつからな。」

「平次・・・。」

ピポパポ

ブルルル

「はいこちら捜査一課。」

「もしもし、僕です目暮警部。」

「おおー工藤君！どうしたんだね。」

「トロピカルランドのジェットコースター前にナイフを持った危険な男が。」

「なに！すぐ行く！」

「警部、和葉ちゃんが人質にとられてしまいました。」

「分かった、行くぞ高木！」

ガチャ

「新一、目暮警部に連絡したの？」

「ああ、けどその前に服部がなんとかしちまいそうだけだな。」

「お前、竹刀持ってるやないか。」

男の肩に竹刀が二本

「小生と勝負する気かい？色黒ボーイ。」

なんやこいつ頭平気か？

「ああ、そういうこつちや。」

「じゃあ、君が勝ったらこの子を返すよ。」

「俺が負けたらどうすんのや？」

まあ、そんなことありえへんけどな。

「この子をメイド喫茶のメイドにするよ。」

「メイド！！」

男はデレデレしながら和葉の頬に手を置く

「和葉に触んなボケエ！！」

「おっと、ごめんごめん。」

和葉は泣きそうや

あいつ泣き虫やから・・・。

俺があん時手ーつないどつたらこんなことにはならなかったんやろ  
うか

そんなの恥ずかしいやんか

今更手ーつなぐなんて

「和葉を渡さへん。」

「平次……。」

おっ！服部のやついいこと言っじゃんか

「和葉をメイドなんかしたら店がつぶれるやないか。」

「なんよそれ！」

おいおい……

「けどな、和葉。」

「なんよ。」

「渡さんのはホントやで。」

「えっ……。」

「泣かんと待つとき。」

「・・・うん。」

俺は男と勝負することになった

絶対負けへん！

「服部！」

「なんや工藤。」

「和葉ちゃんを助けるよ。」

服部なら勝てると思うけど・・・。

「あたりまえやないか。」

あの男、実力者だぜ。

気をつけろよ、服部。

## #9 「人質は和葉！」（後書き）

次回は二人の対決です。

和葉と平次はくつつけてあげたいです。

新一と蘭ですよ。

結奈は園子といいコンビって感じなので^^

## #10 「勝負の行方」(前書き)

大阪弁ってやっぱ難しいなあ・・・。

あと何話かで平次と和葉は大阪に帰ります。

そろそろシヨッピングの話書かなきゃ^^^ ;

## #10 「勝負の行方」

なあ和葉

お前と俺は幼馴染やろ？

なんや分かんけど

ほかの男といたりするとむかつくんや

お前は俺にとって子分やのにな

「平次！勝負なんてアカン！」

助けて欲しいけど・・・

「和葉、大丈夫やで。」

平次の顔・・・真剣や

「私と助けんかったら合気道で動けんよーにしてやる！」

だから助けて・・・平次

「素直じゃないやつちゃ。」

「えっ・・・？」

「助けてほしいんならそう言えや。」



平次ってアホや・・・私は子分なんやろ？

優しすぎや・・・

「キヤアアアア！女の子が人質に！！」

「なによあいつ！」

「キヤー！キヤー！」

トロピカルランドはパニック状態や

「じゃあ、行くでオタク。」

オタクは和葉を放したんや

「小生も行くよ、色黒ボーイ！！」

色黒ボーイって言うなボケエ！！

「面！！小手！胴！」

なんやこいつ全部すんなりかわしおって

「服部ー！油断すんなよ！」

工藤、油断なんてせーへん

大丈夫や

「服部くーん！がんばれー！」

ねえちゃん、おおきに

「きゃー！服部君じゃない！がんばれー！」

げっ、あの集団なんや

工藤とねえちゃんの後ろに20人くらい俺の名前呼んでるんや

「色黒ボーイ、小生の方が上手だね！」

「なんやて！」

「めーんー！」

「平次いいいいー！」

和葉、心配すんな

バシッ

「なにー！」

「これくらい、受けられん訳ないやろ？」

ふうー危ないとこやった

こいつなかなかやるやないか

「なあオタク。」

バシッ パンッ ガッ パシッ

「なんだい色黒ボーイ？」

「和葉は絶対渡せへん!!」

バシッ ガッ パシッ

「平次・・・。」

「和葉は俺の子分やああああああ!!」

ビシッ!!

「面あり!一本!!」

和葉は笑顔で立ち上がり、大きな声でそういった

「小生の・・・負け？」

「そういうこつちやな。」

「キヤー服部くんかっこいい!!」

「すてきよー!!」

「平次!!」

和葉は俺によりかかってきた

「アホッ！くつつきすぎや！」

「どっちがアホや・・・。」

和葉はムスツとしてる

「見ろや和葉。」

「なんよ。」

「このお守りがあつたから勝つたのかも分からへん。」

くさりのお守り・・・持ってきてくれたの？

「平次、それ。」

「これないといつも変な目え遭うからなあ。」

「・・・ありがとお平次。」

「和葉ちゃん！」

「蘭ちゃん！！！」

二人はギュツと抱き合つた

「和葉ちゃん、こいつどうしちゃっつ。」

「工藤君・・・こいつはなあ。」

「ひいいいい！！小生は君を解放したじゃないか。」

和葉の目は怒ってる

「あんなあ、一発やつとかんと。」

バシッ！！

「氣い済まへんのや。」

バタッ

オタクは倒れてもうた

和葉の本気は痛いであ

俺は寸止めしてやったけどなあ

「和葉。」

「なに？」

ギュッ

「平次！！」

「子分は守ってやんなきゃあかんやろ？」

おお！とつとつ手をつないだぜ！

作戦1 「服部と和葉ちゃんに手をつないでもらおう大作戦」成功！

## #10 「勝負の行方」(後書き)

新一「次回あたりで結奈ちゃんが出てきそうだけど？」

作者「できまーす^^」

新一「笑顔で言うなよ！」

作者「13話で結奈のことが分かりますよ。」

新一「じゃあ、決め台詞いっちゃうか！」

作者「それではいつもの決め台詞！」

新&作「真実はいつもひとつ！」

## #11「新一と蘭々約束」(前書き)

題名と話に関連性が・・・^^；



## #11「新一と蘭の約束」

その後目暮警部と高木刑事が来て、オタクを連行した。

オタクは大規模な企業に失敗したらしい。

その後メイド喫茶を経営。

オタクの間では方言を喋る女の子が人気らしい。

そこで大阪弁を話していた和葉ちゃんに手を出したらしい。

まったく人騒がせなオタクだぜ。

「あー、楽しかった。」

「あのコースター結構楽しいやんか。」

俺達はオタクが連行された後、ジェットコースターに乗った。

結構スリルがあって楽しかった。

「じゃあ、こっからは別行動やな。」

「ああ、そうだな。」

「じゃあね、蘭ちゃん。」

「うん、和葉ちゃん。」

俺等は服部たちと別れた

「ねえ、新一。」

「ん？」

「どこ行こっか？」

うーん・・・どうしようか。

「お前の好きなところでいいよ。」

「じゃあ・・・観覧車かな？」

「決まり！じゃあ行くか。」

俺達は観覧車に向かった

くそのころ・・・

「園子さん、観覧車行こうよ！」

「そうね、いきましよう！」

俺達は観覧車乗り場に行った

「ふうふう着いたあ。」

「結構遠かったね。」

「ああゝ疲れたわゝ！」

「結奈もおゝ。」

えっ・・・今の声

俺等は後ろを見た

「ああ！！園子じゃねーか！結奈ちゃんもいるし。」

「なんで??？」

「げっ！結奈ちゃん、逃げるのよ！」

「ええゝ・・・分かりましたあ。新一さんバイバイ、蘭さん明日の約束忘れないでねえ。」

二人は猛ダツシュで逃げていった

「たく園子のやろー・・・。」

俺等がここににいること知ってたくせによお。

「新一、のろっ！」

「ああ、わりいわりい。ボーっとしてた。」

「もう、早く早く！」

蘭のやつやけにテンション高いなあ。

まあ、いいけどよ。

「わあゝ・・・すごいすごい。」

「おいおい、まだ3メートルくらいしか上がってないぞ。」

「見て見て！あれ服部ちゃんと和葉ちゃんよ！」

あいかわらず目いいなあ・・・。

二人はアイスクリームを食べていた。

「新一、服部君をみて！」

「えっ？」

なんと服部が和葉ちゃんのアイスを一口もらってたのだ。

すごい進歩だなあ・・・。

俺も頑張んなきゃ・・・。

「あのさ、蘭。」

「なに？新一。」

「俺・・・。」

だああああ！恥ずかしくって言えねーよ！

「なによあらたまっちゃってえ、変な新一。」

「いや、なんでもねえ。」

結局言えなかった……。

「なあ、蘭。」

「なに？」

「好きなやつ……いるか？」

「っ！なにバカなこといつてんのよ！」

「本気で聞いてるんだ。」

俺は真剣に聞いた

まさか他に好きなやつがいるんじゃないかって

「……いるよ。」

「えっ？」

「誰かはいえないけどね。」

まさか……俺？

いや、そうじゃないかもしれない。

「俺、蘭に勝って欲しい。」

「えっ？」

「結奈ちゃんとの決闘、蘭に勝って欲しい。」

「新一……。」

「結奈ちゃんには悪いけど、俺が好きなのは……。」

「いえない……恥ずかしくってたまんねー。」

「新一。」

「ん？」

「新一の好きな人の名前、決闘で勝ったら教えて欲しいの。」

「蘭……、いいぜ教えてやるよ。」

「そんなときにいい台詞考えとこっと。」

「絶対よ、絶対！ほら指きり！」

「分かったよ。」

『指きりげんまん嘘ついたらハリセンボンのーますっ！指切った！』

「なんか・・・ガキみてえ。」

「ホント・・・プツ。」

『アハハハハ』

下に着くまで他愛の無い話をたくさんした。

たくさん笑った。

すっげえ楽しかった。

蘭という時が一番楽しい。

決闘の日に伝えなきゃ・・・ん？待てよ・・・。

「なあ、蘭。」

「なに？新一。」

「決闘って・・・いつだ？」

「えっ？・・・知らない！いつだろう？」

おいおい・・・。

「けど明日聞けるから。」

「それもそーだな。」

また笑う

蘭の笑顔が好きだ・・・。

そんなこと口が裂けても言えねーけどな。

「新一、着いちゃったね。」

「ああ。」

「楽しかったね。」

「ああ。」

「今度は・・・二人で行こうね。」

「そうだな・・・。」

俺等はまた手をつなぎ、遊び回った。

服部達・・・楽しくやってっかなあ。

またケンカしてたりして・・・。

まあ、あいつらしいか。

「新一、アイス食べよーよ。」

「ああ、俺ちヨコ。」



「私バナナにしよっかな。」

今日は楽しい・・・。

明日は園子と行くんだっただ・・・。

今日のこと怒った。

ったく・・・あいつ。

「蘭、次どこ行く?」

「んーと・・・展望台。」

「じゃあ・・・行くか!」

「うん!」

#11「新一と蘭の約束」(後書き)

新一「次回はなんだ？」

作者「平次と和葉の話ですよ。」

新一「じゃあ、決め台詞・：。」

作&新「真実はいつもひとつ！」

#12 「和葉の鼓動」(前書き)

タイトル微妙かも・^・^ ;

## #12 「和葉の鼓動」

オタクから守ってくれた時の平次は  
すつごくかつこよかったんや

嬉しかった

「なあ、平次。」

「なんや？」

「アイス食べへん？」

「いいけど。」

「私、苺がいい。」

「俺は・・・レモンやな。」

「ちょっと待ってて、買ってくるわ。」

工藤達・・・うまくやっとなるやろか・・・

ちょっと気いなるな

「はい、平次。」

「おおきに。」

パクパク

「おいしい！この甘さたまらへん。」

「そんなうまいんか？」

「うん、もつめっちゃおいしい。」

ちよつと食べとおなつてきた・・・

「和葉、一口くれ。」

「ア、アホ！じ、自分で買えやあ・・・。」

ドキドキドキ

もう、なんやねん平次のやつ

それじゃあ間接キスやん

「なにボケーっとしてん？」

「な！ボケーとなんてしてなっ・・・。」

パクッ

「んー・・・確かにうまいなあ。」

か・・・間接キスやん！

あかん・・・ドキドキする・・・

「・・・・・・・・アホ。」

「和葉、レモン食べるか？」

「いい・・・。」

こんなにドキドキしてんのに

平次の食べたら

ドキドキが止まらなくなる

「どこ行きたいんや？」

「えつと・・・。」

ドキドキして顔も見れへん

「あ・・・・・・・・あれっ！」

私はてきとーに指を指した

「ホラーハウスやないか。」

「あれでいい。」

「じゃあ決まりやな。」

ん？和葉ってこーいうの平気やったか？

まあいいか

くホラーハウスの中く

「キヤアアアアアアアアアア！！」

「落ち着けや、和葉・・・。」

あかん・・・だめやこりや

「キヤアアア！平次・・・首・・・首・・・。」

「落ち着けや和葉！」

「だってだって・・・。」

「ほら、行くで。」

平次はもつとしっかり手を握ってくれたんや

嬉しくてたまんなかった

「なあ・・・平次。」

「なんや、やっと落ち着けたか。」

「工藤君と蘭ちゃんが付き合ったら・・・。」

「付き合ったら・・・なんや？」

「平次の・・・好きな人教えてほしいんや。」

「!!」

なに言うとんや和葉！

俺は好きな人なんて・・・

「・・・じゃあ初恋の人でいいから教えてや。」

「!!」

アホぬかせ！

俺の初恋の人って・・・

お前やないか！

言えへん・・・

恥ずかしいやないか

今、お前は子分なんや

そうや、子分や

「・・・分かった。」



「えっ？」

「工藤とねえちゃんが付きおうたらでいいんやな？」

「そうやけど・・・いいの？」

「付きおうたらな。」

うそ・・・平次の好きな人が聞けるんや！

「いこつ、平次。」

なんやこいつ・・・急に元気になりおうて

く出口く

「次、どこ行くん？」

「バイキングにでも行くか？」

「あのおっきい船の乗り物やる？」

「ああ、そうや。」

「じゃあ・・・行こか。」

私達は手をつなぎながらバイキングに向かった

平次もご機嫌やし、今日は楽しい日や

誘ってくれた工藤君のおかげやな

ありがとう

「なんや和葉、にやつきおって。」

「なんでもないっ!」

ほんまにありがとう

#12 「和葉の鼓動」(後書き)

新一「はあゝあいつらも頑張ってるなあ。」

作者「次回、結奈の思いが分かります。」

新一「へえゝゝゝ気になるなあ。」

作者「ではいつもの決め台詞。」

新&作「真実はいつもひとつ!」

### #13 「結奈の思い」(前書き)

結奈が新一を好きな理由やどうして出会ったかとか  
そういうことを書きたかったなのでこの話を書きました  
笑いがありません・・・すいません！

### #13 「結奈の思い」

結奈、今

すっごく寂しいよ……。

ねえ、新一さん

私を助けて……。

（10日前）

「犯人はあなただ！佐々岡さん！」

新一さんはパパを指で指し、そう言った

「うそだよ！パパが人殺しする訳ないもん！」

私は必死に新一さんに訴えた

けど、新一さんは言った

「佐々岡さん、この世に死んでいい人間なんていないんですよ。」

違うよ！パパは……パパは……

人殺しじゃないもん！！

「……自首します。」

「うそ！うそよパパ！」

「ごめん、結奈・・・ママ。」

「あなたー！！」

パパは・・・メイドの木戸さんを殺したの・・・？

「パパ・・・。」

後で新一さんに電話で聞いたの。

パパは、木戸さんが結奈を殺そうとしているのを知ってしまったんだって

パパは結奈を守るために人殺しをしたんだって

結奈は受話器にずっとずっと・・・

「ごめんなさい、パパ。」

その言葉を何十分繰り返し返したんだろう

新一さんはその言葉をずっとずっと聞いててくれた

「結奈ちゃん、もう泣いちゃだめだよ。」

「・・・新一さん。」

「なに？結奈ちゃん。」

「ありがとう……。」

あなたの優しさが温かくって

一緒にいられたらいいって思った

けど、結奈……あなたにひどいことしたわ

あなたがパパを連れて行ったのが許せなくて

あなたに『死んでくれませんか？』って手紙を郵便受けに入れてしまった

謝りたくて

謝りたくて

あなたに謝りたくて

あなたの家に行ったの

けど、あなたには

蘭さんという存在があった

結奈には

新一さんが必要なの

だからキスした

蘭さんの心を傷つけてしまったけど

あなたが欲しかった

あなたが好きなの

あなたが蘭さんを好きだとしても

結奈は新一さんが好きなの

けど

あなたはさつきも

蘭さんといった

なんで

なんで

なんで結奈じゃだめなの!!

「結奈ちゃん??」

ハッ

「園子さん・・・なに?」



「なんか怖い顔してたから、平気？」

「うん、それよりもう一回ジェットコースター乗らない？」

「いいわねえ・・・よしつ、乗るわよ！」

結奈・・・今は楽しいよ

園子さん、優しいもん

新一さんは

蘭さんとの決闘に勝ったら

手に入る

だから頑張る

結奈、頑張る

「園子さん、速くいこーよー！」

「はあああ、若いていいわねえ・・・はあああ・・・。」

蘭さんに言おう

明後日に決闘しよう

明日はショッピングをめいっぱい楽しんで

明後日は決闘であなたに勝つ

「負けない・・・。」

### #13 「結奈の思い」（後書き）

平次「はぁーあのラブレターは結奈つつう女が書いんや」

和葉「工藤君もてもてやなあ。」

作者「平次君もですよ、和葉ちゃん。」

和葉「そうなんよお。」

平次「なんで俺ももててことになつとんのや。」

和葉「だって、さっき服部く〜んとか言われてたやん。」

作者「このままだと喧嘩に・・・では決め台詞！」

全「真実はいつもひとつ！」

#### #14 「最後のジェットコースター」(前書き)

話にまとまりが無くなってしまったのに反省です・・・。  
次回はおもしろくします、はい。

## #14 「最後のジェットコースター」

「平次、あのコースターもう一回乗らへん？」

「ああ、それはいい考えやなあ。」

「新一、もう一回ジェットコースター乗らない？」

「ん？いいぜ、じゃあ行くか。」

「うん。」

「楽しみやなあ・・・さっきからずっと乗りたいで思ってたんや。」

「俺もや。」

ドンッ！！

「いたっ・・・。」

「あつ、すんません！前見てなかったもんで。」

「こちらこそ・・・って服部！」

「なんや工藤やないか。」

「蘭ちゃん！」

「和葉ちゃん！」

そっちはうまくいったみたいだな、服部

そっちはうまくいったみたいやな、工藤

「平次、私蘭ちゃんの隣で乗るから。」

「新一、そういうことだから。」

おいおい……

なんで俺が服部と隣なんだよ・

まっいつか

「なあ、工藤。」

「あ？」

「ここ、結構楽しいやんか。」

「そうだろ？」

「ああ、また来たいなあって思ってたところや。」

服部達……進展したみたいだな。

「和葉ちゃんと二人でか？」

「ド、ドアホ！！そんなやないゆーてんやろ！」

顔、赤いぞ・・・服部

けど、俺も結構楽しかった

今度は蘭と行くと思う

決闘の勝利が決まったらな

「らん!!」

おいおい・・・この声

「園子!! 結奈ちゃん!。」

やっぱり・・・

「蘭さん、決闘のことなんだけどお。」

「結奈ちゃん、決闘っていつなの?」

「明後日でもいいですかあ?」

明後日!?

また急な話だなあ・・・。

「和葉。」

平次はこっちこいって手を上下に動かした

「なんや？」

「決闘ってなんのこっちゃ？」

「私も知らんや。」

「後で工藤に聞いてみるしかないみたいやなあ。」

「そうやね。」

たくらむ二人

笑顔の結奈ちゃん

とまどう蘭

にやにやしながらこっちを見てくる園子

だー！！前もこんな事あったぞ！！

「なにボケーっとしてるんや工藤！次やぞ次！」

お前はいいなあ・・・

俺は俺で苦労してるんだよ！

「新一さん・・・。」

「なに？」



「……いいえ、なんでもありません!。」

言えなかった

”ごめんなさい”

この一言だけなんだよ

結奈が悪いのに……

”死んでください”

こんな言葉……口にしてもいけない

書き言葉で表してもいけない

「おつ、スタートや!」

服部……なんてご機嫌なんだろう

ガタン　ガタン　ガタン

「し……新一……。」

「お前……さっきも乗ったじゃねーか。」

まったく……相変わらず怖がりだなあ

「園子さん。」

「ん？なに？」

「今日は・・・ありがとう。」

「いいてことよ。」

ガタン・・・

「キヤアアアアー！！」

「ひゃっほーい。」

蘭のやつ・・・すっげえ悲鳴

「なんで落ちるんやー！！」

「あたりまえやろ！ジェットコースターなんやから。」

「いえーい！」

「キャッ！こわーい。」

みんな楽しんだみたいだな

よかった・・・

まあいろいろあったけど

服部たちも発展したし

めでたしか・・・

「新一さんっ、蘭さんっ、関西のおねえちゃんと平次さん！バイバイ」

「じゃあな、結奈ちゃん。」

「なんで私は関西のねえちゃんなん？」

「しゃーないしゃーない。」

俺達はトロピカルランドを後にした

「ほんまに楽しかったなあ。」

「あつ、私買い物しなきゃいけないんだ。」

「そーなのか？」

「うん、だからバイバイ。」

「じゃあな。」

「バイバイ、蘭ちゃん。」

「じゃあなーねえちゃん。」

俺達は蘭と別れ、家に帰った

そのあと俺がどんな目に遭うか・  
・  
・

#### #14 「最後のジェットコースター」(後書き)

新一「結奈ちゃんって謎めいてるなあ。」

作者「あれ？前話で大体分かったかと・・・。」

新一「そうなのか!？」

平次「工藤、前話を知らんのか？」

新一「・・・。」

作者「まあ、みなさん評価よろしく!返信するから。」

和葉「ではいつもの決め台詞や!」

平次「和葉!いつものまに!」

全「真実はいつもひとつ!」

#15 「星空の下の話」(前書き)

今考えたら・・なんでキスされたとき結奈が  
分かんなかったんだろ・・失敗ですねえ^^;

# 15 「星空の下の話」

辺りは真っ暗

空には綺麗な星

家に灯る明るい光

「工藤君。」

この声……

「なんだよ……宮野。」

「この手紙、可愛い子から預かったわよ。」

「ん？」

「おっ、ねえちゃんこの前はサンキューな。」

宮野のやつ……相変わらずツンツンしてんなあ

「別に、それより和葉さん。」

「なんや？」

「デート……楽しかったみたいね」

宮野は微笑んだ

「もお・・・なんでもお見通しなんやな。」

「なんやなんや?」

「平次には関係あらへん。」

和葉ちゃん・・・笑ってんじゃん

「服部君。」

「なんや・・・ねえーちゃん・・・。」

服部・・・苦手なんだよなあ宮野のこと

ん?なんかひそひそ話してんなあ・・・。

「和葉さんのこと、幸せにしないよ。」

「!!--」

おっ・・・服部のやつ顔真っ赤だなあ

「工藤、家開けろや。」

「へいへい・・・。」

俺ん家だぞ・・・おいおい

ガチャ



「工藤、あとであのねーちゃんの言ったこと教えてやるわ。」

「ああ……。」

服部のやつ……なに言われたんだ？

「それよか、決闘ってなんなん？」

「ああ……実は……。」

「だいたい分かってきたで。」

え……分かったのか？

「工藤を、結奈つつーやつとねえーちゃんを取り合ってる？」

……凶星じゃねーか

「そうだよ……。」

「工藤君は蘭ちゃんを取るんやろ？」

「取るとか取らねーとかあいつは物じゃねーから。」

「かぁーよく言うわぁ。」

「かつこい……。」

「明後日なんやろ？決闘。」

「ああ、そうだけど。」

「和葉、明後日までいてもいいか？」

「そりゃ、蘭ちゃんの応援したいけど……。」

おいおい……勝手に決めんなよ

「けど、工藤君に悪いやん。」

さすが和葉ちゃん……

「かまへんかまへん、工藤もあと二日くらい置いてくれるさかい。」

「いいの？工藤君……？」

あと二日くらいなら……

「ああ、しゃーねーからな。」

「平次、明日どっか行かへん？」

「またかいなあ……まあ暇やしええけど。」

「つたく！ここが俺の家だって分かってんかよ！」

「ふぁーあ……ねむなってきた。」

「もう寝ろや、疲れたんやろ。」

「うん、おやすみ。」

ボタン

「・・・寝るわけないやん。」

和葉は二人がいる部屋のドアによりかかって聞き耳をたてている

「で、宮野が言ってた言葉って？」

「・・・・・・・・。」

（なんやろ・・・気になるなあ。）

「和葉さんのこと、幸せにしないよ。」

「宮野らしいや。」

（志保さん！そんなこと言ったん！？）

「工藤、結奈つつーやつになんにもされてないやろなあ。」

「・・・・・・・・。」

沈黙

ガチャン

「工藤君、教えてえなあ。」

和葉は部屋に入った

「なんや！！和葉寝たんとちゃうか!？」

「寝れなくてな、戻ってきたんや。」

あ、あかん・・・さっきのねえーちゃんの言葉聞かれたかもしれん

「和葉・・・どつから聞いてたん?」

・・・やばいんとちゃうか?聞かれとつたら・・・

「工藤、結奈つつーやつになんにもされてないやろなあ、つてとこやで。」

うそついてもうた

「そか、それよか工藤！はよー教えろや!」

「・・・キス。」

『キス!?!』

「ファーストキスを奪われたんだ・・・。」

「はあ！なにやってん工藤!」

「あれは不可抗力ってやつで・・・。」

詳しく説明中・・・

「ほーなるほどなあ。」

「まあ、そういうこと。」

「工藤君、結奈ちゃんと知り合いなん？」

「ああ、十日前に事件があつてさ。」

「結奈ちゃんと関係あるん？」

「結奈ちゃんのお父さんが犯人でさ。」

「そうやったんか・・・。」

結奈ちゃん・・・どうして俺がいいんだろ

「けど、俺は結奈ちゃんの顔あんまり見てなくつてさ。」

「じゃあ、キスされたときに結奈ちゃんか分かんかったの？」

「なんやそれ。」

「ああ、髪形ちよくちよく変わつてるしさあ。」

「ふーん・・・。」

「俺、そろそろ寝るわ。」

「ああ。」

「おやすみい。」

ボタン

「……………」

今・・・二人つきりやん

どないしよう！

「く・・・工藤君もかわいそうやなあ・・・。」

「そうやなあ。」

「私、そろそろ眠うなってきた。」

「俺もや。」

「おやすみ、平次。」

「おやすみい。」

明日は楽しみやなあ。

蘭ちゃん、結奈ちゃんと出かけるらしいなあ。

工藤君は園子ちゃんに付き合わされたみたいやなあ。

さっきの言葉・・・聞くんやなかったわ

恥ずかしくて眠れへん！

#15 「星空の下の話」(後書き)

新一「次回はなんだ？」

作者「結奈と蘭のショッピングですよ。」

新一「あっ!!」

作者「な、なんですか？」

新一「宮野からもらった手紙・読んでね。」

作者「#17辺りで読ませますよ。」

新一「そっか、じゃあいつもの決め台詞！」

作&新「真実はいつもひとつ！」



#16 「新一さんが好きですか？」（前書き）

蘭の言葉使いがよく分かんない^^；  
あと少し続くから最後まで見てやってね。

#16 「新一さんが好きですか？」

快晴な青空

小鳥のさえずり

なんていい天気だろう

「お父さん、行ってきます。」

「まったく今日は誰と行くんだよ。」

「佐々岡結奈ちゃんって子よ。」

「えっ……。」

「どうしたの？お父さん？」

急に顔色変えちゃって……

「確か、十日前くらいに事件があったんだよ。佐々岡さん家で。」

事件……？

そういえば、新一は事件で結奈ちゃんに会ったんだよね。

「そうなんだあ……。」

けど、結奈ちゃん元気よね

「あつ、もう行かなくちゃ。」

「ああ、じゃあな。」

私は走って新一の家に向かった

五分後

「蘭さん!」

「!」

ピンクのフリフリワンピース

白いフリフリカーディガン

「蘭さんかわいいですよ。」

「あ、ありがとう。」

結奈ちゃん芸能人みたい

「じゃあ、行きましょうよお。」

「……………負けたかも。」

「今日はどこ行くのかな?」

「んー原宿がいいですう。」

「いいわよ。」

正直言つて・・・意外だわ。

銀座とか新宿のブランド店を回るのがと思った。

「蘭さん、電車が来ましたよ。」

「あつ、ごめんごめんボーつとしてた。」

さつきからいろんな人がこつち見てるよ。

結奈ちゃんが可愛いからかな？

ガヤガヤガヤガヤ

「着いたー！」

見るとこ人、人、人、人。

「蘭さん、行きましょうー！」

私は結奈ちゃんに引つ張られた

「きゃーこの服かわいー。」

「ホントだね。」

聞いてみようかなあ。

「あのさ、結奈ちゃんの家で事件があったって本当？」

「っ！！」

聞いちゃまずかったかなあ？

「あとで、言いますね。」

「う、うん。」

聞いて平気だったのかな？結局。

「結奈ちゃん……。」

「はい？」

もう一つ聞いてみたかったことがある

「新一のどこが好き？」

「全部だよっ！」

「えっ？」

「だって容姿も性格もみんなみーんな好き。」

「そっか。」

うらやましい。

好きって素直に言える結奈ちゃんが

新一のファーストキスを奪ったのは許せないけど

うらやましい。

「じゃあ、蘭さんは？」

「えっ？」

「新一さんが好きですか？」

「えっと。」

いつもいつも

ただの幼なじみって言うてきた素直じゃない自分

ずっと好きだと思ってきた素直な自分

「ごめんなさい、ショッピング中なのにい。」

「う、ううん。」

言えなかった

”新一のこと好きよ”って

言えなかった

「きゃくクレープだあ。」

「あれ？」

クレープ屋なのにいすとテーブルがあるんだあ。

「いらっしやいませ、お嬢様。」

わあー店員さんみんながお辞儀してるよあ。

「私、いつものやつお願いね。」

いつもの！常連さんなんだあ。

「私、チョコバナナ一つ。」

「かしこまりました。」

「蘭さん、座ろうよ。」

「結奈ちゃん、さっきの話・・・。」

「うん、それを話そうと思ったの。」

「私のパパは逮捕されてしまったの。」

「ええ？」

結奈ちゃんのお父さんが？

「私の家にはお手伝いさんがいたんだけどねえ。」

「うん。」

「その人、私を殺そうとしてたんだって。理由は知らないけど。」

「じゃあ、お父さんは結奈ちゃんのために？」

「……うん。」

そんなことがあったなんて……。

「けど、私を支えてくれたのは新一さんの優しさだった。」

「……。」

「新一さんが必要なの、新一さんの優しさが必要なの。」

そんな理由があったなんて……。

ファンだと思ってた……。

「おまたせしました、チョコバナナでございます。」

「ありがとうございます。」

慣れないなあ……。

「あれ？クレープって手に持つんだあ。」



「へっ？」

「お嬢様、スペシャルクレープでございます。」

「ありがとうございます。」

スペシャルクレープ！？

すごい……。

お皿に乗ってるよ……クレープが。

ナイフとフォークで食べてるよお。

「それ、いくら？」

「えっと……4000円だけど？」

4000円！？クレープなのに！？

よく見たら……キャビア乗っかってるよ。

「んーおいしい。蘭さんも頼めばいいのにい。」

「い、いいよ……。」

おそるべし、お金持ち。



#16 「新一さんが好きですか？」（後書き）

新一「次は??」

作者「次回は、園子ちゃんとお出かけでしょ。」

新一「まあな・・・。」

作者「みなさん評価よろしくねえ。」

新一「してあげないと作者が泣くぞ。」

作者「泣きません!じゃあいつもの決め台詞!」

二人「真実はいつも一つ!」

#17 「結奈の手紙・園子の言葉」(前書き)

珍しく園子が真面目？

ふふふ・・・。

#17 「結奈の手紙・園子の言葉」

ピンポンピンポンピンポンピンポン

「だー！！まだ9：00前じゃねーかああああー！！」

「落ち着けや・・・工藤。」

「それにしてもまだ早いよねえ。」

パンツ！

俺はドアを思いっきり開けた

「新一君、遅いじゃない！」

「お前・・・9：30って言ってたじゃねーか！」

「だって今、9：30・・・時計止まってたわぁアハハ。」

おいおい・・・。

「ごめんね、時計変えてくる。それと・・・。」

「それとなんだよ？」

「結奈ちゃんから、手紙もらってない？」

「えっ・・・？」

そーいえば・・・宮野が預かったっていう手紙。

差出人・・・結奈ちゃんだったなあ。

「あるけど?」

「じゃあ、後で持ってきてくれない?」

「ああ、なんでだよ?」

「いいから持つてきなさいよ!いいわね。」

「へいへい。」

なんで俺がお前の言うこと聞かなくちゃいけないんだよ。

「まったく・・・。」

「じゃあね、9:30になったら迎えに来るから。」

「ああ、じゃあな。」

園子はゆっくり歩いて帰ってった。

「まったく・・・マイペースなお嬢様だこと。」

「工藤、言い忘れてたんやけど。」

「なんだよ・・・服部。」

「ちょっと待ったとき。」

服部は部屋を出ていった

「なんやろなあ。」

「なんだろ・・・。」

ボタン！

「これやこれ！」

「ああー、ラブレターかあ。」

「これ、中見てみい。」

なんだ・・・これ？

一回封開けてあんじゃねーか。

「死んでくれませんか？」なんだこれ？

「いたずらにしては度が過ぎとんのとちゃう？」

「工藤君、手に持ったんのなんや？」

「これか？結奈ちゃんからだよ。」

「読んでもいい？」

「アホ！なんでお前はそーいうこと。」

「いいよ。」

「えっ？いいの？」

和葉ちゃんは早速中を見て、読んだ。

『新一さんへ

”死んでくれませんか” って手紙は結奈が書きました。  
ごめんなさい。けどね、結奈は・・・

新一さんが好きなんです。あの、事件の時から

蘭さんに決闘で勝ってみせます。

絶対勝ってみせるから・・・。

もし、私が勝った時は

頭をポンポンしてくれませんか？

寂しさが消えていくから・・・。

あなたが愛しいから・・・。

結奈より

』

「工藤君にべた惚れやん・・・結奈ちゃん。」

「そつやな・・・。」

「・・・・結奈ちゃん。」

「なんか断りにくくなってもったなあ。」



「ああ・・・。」

ピンポンピンポンピンポン

「げっ！もうきやがった！」

「まあ、もう9・20やしいんとちゃう？」

「そうだな、どうせあと十分だしな。」

俺は手紙とバッグを持って玄関に行った。

ガチャ

「じゃあ、行くか。」

「そうね、それより手紙見せなさいよ。」

「へいへい。」

園子のやつ・・・やけに真剣に見てんじゃないか。

「新一君。」

「ああ？」

「蘭を幸せにしてあげてね。」

「え？」

今日はふざけてねーみたいだな。

「蘭は新一君のことずっとずっと見てきたのよ。」

「。。。。」

「１１日前から好きになったっていう女の子にのりかえないでね。」

「園子。。。。」

「私、二人のこと見てきたけどさっ。」

「。。。」

「二人はお似合いだよ。」

「お前もな。」

「はあ？」

「真さん、結構お似合いだぜ？」

「きゃー！ホント？それホント？？」

「やばい・・・テンションがやばい・・・」

「やっぱりそうよねーきゃー！！」

「話・・・変えよう。」

「そーいや、今日どこ行くんだ？」

「えっ？ああ銀座よ。」

「銀座？」

「さあー行くわよお！ー！」

「へいへい・・・。」

（一時間後）

「ねえねえ、この服よくなーい？」

「素晴らしく似合ってますよ、お嬢様。」

「あんた、それ本気で言ってるの？」

「あつたりめーだろ。」

「ふーん、じゃあこれとこれとこれとこれと。」

「どんだけ買っただよ・・・。」

「だいたいもう俺・・・持てねーぞ。」

「両手に服、靴、バッグ、アクセ・・・etc」

「新一君、ありがとなっ」

お前・・・それが目的かよ。

「そっぴいやお前、なんで昨日トロピカルランドにいたんだよ!」

「ああ、結奈ちゃんが家に来てねえ、それから遊ぼってことになつてさ。」

「ふーん。」

なんか怪しいけど・・・まあいいか。

「あのブーツよくない? ねえねえ行きましようよ。」

「もういいだろっ!」

夜、新一が腕を痛めてしまったのは言うまでもない。

#17 「結奈の手紙・園子の言葉」(後書き)

新一「あー腕いてー。」

作者「今回は和葉と平次がつ！」

新一「なんかあいつらの方が目立ってないか？」

作者「ギクッ！」

新一「お前、服部派だもんなあ。」

作者「あ、あはは・・・それではいつもの決め台詞！」

全「真実はいつも一つ！」

#18 「永遠の絆」(前書き)

題名の意味は・・・本文で！

#18 「永遠の絆」

なあ、平次

私、東京来てよかったって思うんよ。

だって今

幸せやもん。

「平次、今日どこ行く？」

「サンシャインとかでいいんじゃないか？」

「水族館かあ、行きたい！」

和葉のやつ・・・ニコニコしてんなあ。

・・・って俺はあいつの親分や！

あいつは俺の子分や！

なに氣いしとんのや！

平次は自分の頭をポカスカポカスカ叩く

「なにしとん？」

「なんでもあらへん！」

「そうなん？じゃあ行く、平次。」

「あ、ああ。」

最近なんか変や。

和葉のこと意識しとるような・・。

そりゃ、初恋の人は和葉や。

けど、今は子分や。

そうや子分や。

「平次、なにしとん？」

「ああ！工藤から鍵阿預かつとらん！」

「なにやつとん・・。」

鍵かけな無用心やなあ。

留守番してもらう人・・・！

「和葉、いーこと考えたんやけど。」

「じゃあ、そのいーことをはよーやってや。」

俺はあるところに電話をかけた



ブルルルルル

「はい、こちら毛利探偵事務所ですが。」

「おっちゃん、俺や。」

「お前、色黒探偵！」

「悪いんやけど、工藤ん家で留守番してくれへんか？」

「なっ！なんで俺がああ男の家で留守番しなきゃいけないんだよ！」

「そや！今度家に来てや、オカンが言ってたん忘れとった。」

「静華さんがっ！」

「留守番してくれたらな」

「分かった、すぐ行く！」

ブツ

おっちゃんも単純やなあ。

オカンが美人とか言ってたなあ。

「あ・・・あれ見い！」

和葉が指差す先には・・・

「ハアハアハアハア。」

「おっちゃん！」

全力で走る毛利小五郎

「探偵ボウズの家にいりゃいいんだろ？」

「そや。」

静さんに会える・・・。

「毛利小五郎！この家を守り、静華さんに会います！」

「ほなな、おっちゃん。」

「よろしくなあ。」

おっちゃん、サンキューな。

おっちゃんは今や人気の探偵や。

ねーちゃんが言うには毎日依頼が三件はあるらしい。

まあ、俺の方が上やけどな。

くサンシャインく

「平次、このクマノミかわいいなあ。」

「そやな。お前よりかわいいなあ。」

「なんやそれ。」

「ホンマやないか。」

あつ、お土産コーナーやないか

「和葉、ねーちゃんにお土産買ったほづがいいんとちゃうか?」

「そや!忘れとつた。」

「ほな、行こか。」

蘭ちゃん、なにがいいんやろ?

「このストラップ、工藤にいいんとちゃう?」

「工藤君にタコって合わへんよ。」

「合う合う。」

「どーせなら蘭ちゃんとペアにしとつたらいいんちゃう?」

「それもいいなあ。」

「あれ見い。」

和葉が指差す方には・・・

ラブラブペアストラップ・・・？

「あれ、いいんとちゃう？」

「和葉の割にはいいもん見つけるやん。」

「あんなあ。」

「和葉、これ欲しいか？」

「えっ・・・？」

まさか・・・このラブラブペアストラップ？

「この二人の絆は永遠にってやつちゃ。」

「へっ・・・？」

ラブラブペアストラップの隣にあるのが

二人の絆は永遠にストラップ。

「欲しい。」

ラブラブやなくても

絆は永遠ってのも嬉しいもんなあ。

けど・・・ラブラブの方がいいなあ。

「平次、私トイレ行ってくる。」

「氣いつけや。」

「分かってますー!。」

どれにしようか・・・。

「すみません、これ二つとこれ一つ。」

「はい、しょうしょうお待ち下さい。」

〈3分後〉

「平次、買ったん?。」

「ほら、クマノミがいいんやろ?。」

「おおきに。」

永遠の絆か・・・。

今はまだラブラブやなくても

いつか・・・な。

「平次もケータイに付けてや。」

「もう付けてるやん。」

ホンマや・・・。

「私も付けよつ。」

今日も楽しかった・・・。

「なあ、平次。」

「なんや？」

「楽しかったな。」

「そやな。」

『ただいまー！』

「おお、おかえり。」

「おっちゃん、サンキューな。後でオカンに言っとくわ。」

「静華さん・・・。」

アカン・・・自分の世界に入ってもうた。

「ただいま・・・。」

「おお、工藤。」

「あれ？なんでおっちゃんが？」

「おお、探偵ボウズ。じゃあ、俺は帰るわ。」

「は、はあ。」

バタンッ

「工藤君へのお土産あるんやで。」

「マジ?」

「ああ、これや。」

いるかとシャチのペアストラップ

「いるかは蘭ちゃんのや。」

「サンキュー。」

これがラブラブストラップってのは

二人は付き合ってから教えるってことで

明日は決闘やったな。

がんばれよ、ねーちゃん。

「工藤君、明日決闘やね。」

「ああ。」

「私らは蘭ちゃんの応援すんで！」

「で、どこで決闘やるんや？」

「帝丹高校の体育館を三時間貸切にしたらしい。」

「ほー！なんや規模が大きいやないか。」

「大きすぎな気もするけどな。」

「私、夕食作るから待っててや。」

和葉ちゃんはルンルンしながらキッチンに向かった

お前ら・・・今日はなにがあつたんだ？



## #18 「永遠の絆」（後書き）

新一「次はなんだ？」

作者「えつと決闘前夜の話です。」

新一「へえー決闘もそろそろだな。」

作者「ええ、蘭ちゃんに頑張ってもらわないと。」

新一「じゃあ、いつものだっ！」

二人「真実はいつも一つ！」

こんにちは、奈津美です。

かれこれもう18話かぁ・・・と感動^^  
そろそろ決闘です。

もう少し付き合って下さい。

この話の続編が決定しました。

タイトルは「ライバルは婚約者!？」です。

婚約者はフィアンセと読めます。

平次×和葉です。

いつか園子×真 もやりたいなぁ・・・。

話が長くてすいません。

みなさんの評価が私の支えです。

評価はすべて返信していますので見てくださいね。

奈津美

#19 「決闘前夜」(前書き)

なんか微妙な話になってしまった・・・。

## #19 「決闘前夜」

俺は夕食を済ませてから蘭に電話をした。

”頑張れ” って言いたかったから・・・。

「誰も・・・いないよな。」

今頃服部と和葉ちゃんのリビングでテレビ見てるし。

ここは二階だし・・・。

ピポパポピポパポ

「・・・あつ、蘭？俺だけど。」

『新一！どうしたの？』

「あのさ・・・。」

くそのころく

「なあ、蘭ちゃんと工藤君の会話気になるんやけど。」

「そやなー盗み聞きでもするか。」

「そやね。」

二人は新一がいる部屋の外で盗み聞き。

（盗み聞きなんて二回目やなあ。）

「あのさ……。」

『何？』

「明日の決闘で勝つたらさ、俺ん家でパーティしねーか？」

「へっ？」

「だから、俺ん家でパーティしないか？」

新一の家でパーティ？

楽しそう……。

『うん、私も頑張らなくっちゃね。』

「やべーな。」

『えっ？』

「俺のために決闘するなんて歴史に残っちまうぜ。」

『な、なに言ってるのよお。』

くドアの外へ

「かつこいいなあ、工藤君。」

「なにが”歴史に残っちまうぜ”や。」

「平次もあーいーうーこと言えんの？」

「アホ、俺はあいつと違ってキザやないからな。」

「平次が言っただけならおかしいもんな。」

「お前なあ……。」

蘭ちゃんがなに言っただけなのかも知りたいなあ。

（部屋の中）

「で、結奈ちゃんとのショッピングはどうだった？」

「楽しかったよ！」

「そっか、俺なんて園子に荷物持ちさせられて腕いてーよ。」

「園子だから、しょうがないよ。」

「なあ、蘭。」

「なに、新一。」

「俺、応援してやっから頑張れよ。」

「……うん。」

「じゃあな、蘭。」

『ま、待って!』

「ああ?」

『約束・・・忘れてない?』

「バーロー。忘れる訳ないだろ」

忘れらんねーよ。

『じゃあ、言ってみて。』

「ああ、えっと蘭が決闘で勝ったら俺の好きな人を蘭に教える。」

『正解!じゃあ明日頑張っちゃうからね。』

「おやすみ。」

『おやすみ・・・。』

プツッ

ツーツー

電話の切れた音が

誰もいない部屋に鳴り響いた。

なんだか寂しく感じた。

くドアの外く

「蘭ちゃん勝ったら工藤君告白やん！」

「ほー工藤も大胆やなあ。」

「蘭ちゃんに勝ってもらわんと。」

ガチャ

「!！」

「さっきから盗み聞きしてたろ……。」

ゲツ！工藤や！

どないしよか……。

「たまたまや、ほな行こか和葉。」

「う、うん。」

ガシッ

「はーっとりいーいー。」

「堪忍してやあ。」

「お前いい加減にしろおおおおお！」

「うわあああ。」

この後二時間近く

工藤君の家の中で

鬼ごっこが続いたんや。

私は怒られなかったからよかったあ。

「和葉も逃げろや！」

ガシッ

（えっ・・・。）

どさくさに紛れて腕掴んどるよ平次・・・。

ドキドキドキドキドキ

（ああ！もうドキドキしっぱなしや！）

「和葉。」

「なに？」

「楽しかったか？」



「あたりまえやないか！」

「待て！服部！」

「いい事考えたんやけど、平次。」

「ああ？」

「博士の家に隠れるんや。」

「おお！」

その後服部達は博士ん家に行き

俺も追いかけた。

宮野が研究室から出てきて

”静かにしてくれる？”と一言

宮野の言葉、あまりにも迫力があつたため

俺等は家に帰った

あたりはもう真っ暗

満月が町を照らす。

月があまりにもきれいで

俺等はベランダから10分ぐらいずっと見てた。

明日はとうとう決闘だ！

## #19 「決闘前夜」(後書き)

新一「明日は決闘だあゝ。」

平次「今日作者は休みやで。」

和葉「たまには自分達で話せっていうんや。」

平次「明日はねーちゃんの決闘やで。」

和葉「もう楽しみでしゃあない！」

新一「おいおい・・・。」

作者「誰が休みですと・・・。」

三人「！！そ・・・それじゃあいつもの決め台詞。」

全員「真実はいつも一つ！」

こんにちは。

奈津美です。

次回でとうとう決闘です。

まだ最終回まではちよつとあるかな？

もう少し付き合ってください^^;

それと、コメントにはちゃんと返信してますので^^

見てみてください^^

では、次は#20で会いましょうww

## #20 「決闘当日」(前書き)

PCの調子が悪かったため、投稿が遅れました。  
すいません・・・。

#20 「決闘当日」

ピチャン

（ん・・ここはどこだ？）

辺りには綺麗な湖。

湖の周りには緑あふれる自然

花畑、山、川

とても綺麗な場所。

花畑の中に誰がいる。

「・・・蘭？」

かわいい寝息をたてて寝る蘭

「蘭、起きろよ。」

「し・・んいち？」

「おはよう。」

「もう、起きなきゃね。決闘だもんね。」

「そうだな。」

「これは夢・・・?」

「そうだと思うぜ?」

「よかった、新一に会えて。」

「えっ・・・。」

蘭が微笑むからびつくりした。

かわいかった・・・。

「じゃあね。」

「ああ。」

ジリジリジリジリジリ

「んー・・・。」

ジリリリリリリリリリ

「ああ、夢かあ。」

やっぱりなって顔して目覚ましを止めた。

まさか蘭も同じ夢を見てるんじゃないかなんて思う。

ピンポンピンポンピンポン

「・・・蘭？」

まだ6：30だぜ・・・おいおい。

ガチャ

「朝・・・早くにすいません。」

立っていたのは中学生くらいの男の子

「俺、河合裕也つていいいます！結奈を返してください！」

なんかカッコいい男の子だなあ。

「はあ？結奈ちゃんとはなんともねーぜ？」

てか・・・こいつ誰？

「俺は、結奈の幼なじみです！新一さんに渡さない！」

「・・・あのさ、今日、実は・・・。」

「えっ・・・？」

）・・・）・・・）・・・）・・・

ピンポンピンポン

「はい。」

蘭だな、今度こそ・・・。

ガチャ

「おはよう。」

「ああ。」

「蘭ちゃん、応援するで！」

「俺もや。」

「ありがとう、みんな。」

俺たちは帝丹高校に向かった。

〔帝丹高校・体育館〕

「蘭、決闘って何時からだ？」

「えっと・・・そろそろ結奈ちゃん来るはずなんだけど。」

「蘭さん！おまたせしました！」

「結奈ちゃん！」

「勝負方法を説明しますね。」

どんなんだろ・・・。



「倒れた方の負けです。」

へっ・・・？

「それだけの？なんでもあり？」

「もちろんです。間接技でも足払いでも。」

空手って間接技あるのか？

「じゃあ、十分後に始めましょうね。」

珍しく結奈ちゃんは

ぶりっ子でもなく

真剣な目つきで

蘭を見ていた。

「では、私は部室にいさせて頂きますので。」

結奈ちゃんは足音たてずに俺の前を通り過ぎた。

いつもと別人だった。

「工藤君、あの子雰囲気変わったなあ。」

和葉ちゃんも思ったか。

「俺もそう思う。」

「そんだけ工藤が好きってこっちや。」

俺は・・・蘭のことが。

「・・・そうかもな。」

結奈ちゃんは蘭のことライバルって思ってるのかな。

蘭に勝って欲しい。

結奈ちゃんはどうなるんだろうって考えた。

これ以上好きな人を失ってしまったらやばいんじゃないかって

けど、平気だよな。

だってあいつがいるから。

「新一さん!」

「裕也! やっぱ来てくれたのか。」

俺は祐也に決闘のことを教えたんだ。

結奈のこと好きだっていうから

決闘のことくらい教えたっていいよな。

「俺、結奈を応援します。」

へっ……？

「おいおい、結奈ちゃんが勝っちゃったら……。」

「好きなやつを応援するのが普通でしょ？」

こいつ……。

結奈ちゃんが本当に好きなんだな。

「そっか、分かったよ。」

「工藤、二人が来たで。」

始めの位置につく二人

「はああああああ。」

気合を入れる蘭

「すうううううう。」

深呼吸する結奈ちゃん

「あと10秒で開始や！」

和葉ちゃんが言う

「10・9・8・7・6・5・4・3・2・1！」

「試合開始！」

## #20 「決闘当日」(後書き)

こんにちは、奈津美です。

PCの調子が本当に悪くて^^;

部活も忙しくって^^;

大変です・・・。

だいたい25話を予定してますが、それより多くなりそうです。

もう少しお付き合い下さいませ。

評価の方もよろしく願います。

では、次話で会いましょう。

#21 「怪我」(前書き)

タイトル微妙な点、反省してます^^；

#21 「怪我」

「はあああ!!」

スッ

「うりゃあ!!」

バシッ

「すげえ・・・互角じゃねーか・・・」

あの蘭の蹴りをかわすなんて・・・

「なあ工藤・・・もしかして。」

「バーロー。蘭が負けるわけねーよ。」

俺は蘭を信じてるから

俺は蘭に託したかったんだ。

自分の人生を・・・。

「蘭さん、すいませんっ!」

ガッ

「あっ!」

結奈ちゃんは蘭に足をかけた。

ズサー！！

「いたっ！！」

蘭は思いっきり転んだ

「蘭！！」

「っ……。っ」

足首が赤い。

「タイムっていいのか？」

結奈ちゃんは頷く

「タイム！蘭、歩けるか？」

「へ、平気よ。」

足を引きずる蘭

和葉ちゃんが蘭を支えてあげてる。

「ねーちゃん、大丈夫か？」

「ありがとう、服部君。」



俺は蘭に冷却スプレーをかけた後に包帯を巻いた。

「新一、心配してくれてるの？」

「バ、バーロー！あたりまえだろっ！」

ギュッ

蘭は俺の手を握った

「絶対勝ってみせるからね。」

「ああ。」

蘭は笑顔で戻っていった

「試合開始！」

服部が言った

「蘭ちゃん！気合や気合！」

「ハアアアアア！」

バシッ

「ガハッ。」

結奈ちゃんのみぞうちにヒット！

「結奈ー！！がんばれー！！」

「裕也！！」

結奈ちゃんは素早く蹴りを蘭に

「らーん！！」

「平気よ、新一。」

ズキッ

「っ！」

蘭は体制を崩してしまった。

「蘭さん、私の勝ちです！！」

蘭の目の前に蹴りがっ！

「らーん！！」

「ハアアアアアア！！」

蘭は結奈ちゃんの足をつかんだ。

「ハッハッ！！」

蘭は結奈ちゃんに上段蹴り。

「ぐっ……。」

結奈ちゃんにクリーンヒット！

「結奈——！！」

「裕也……。」

なんで裕也がここにいるの……？

結奈の応援しにきてくれたの？

だめ、今は集中しなくちゃ。

新一さんが必要だから……。

「うつ……。」

目が霞んできた……。

新一さん……。

「結奈——！！がんばれ——！！」

「えっ……。」

裕也……どうしてそんなに応援してくれるの？

結奈は、嬉しいよ。

嬉しすぎるよ・・・。

「うりゃああああ!!」

バシッ

「ぐっ!!」

足首に直撃した。

蘭はまた体制を崩した。

「はあああ!!」

パンツ!

「かかと落としや・・・。」

服部は言った。

「ら・・・蘭!」

「くっ・・・。」

ボタン

「あかん、あと10秒で立たな負けてしまっやないか!」

「蘭ちゃん!!」

「らんー!!」

蘭は立ち上がろうとしている。

足が痛いんだろう。

顔が引きつっている。

蘭・・・もう無理すんな。

もう、いいから・・・。

頼むから苦しまないでくれよ。

「10!9!8!」

蘭・・・。

「結奈の勝ちね、蘭さん。」

「ま、まだ終ってない・・・。」

「まだ言つの?」

蘭のやつ・・・。

あいつ、負けず嫌いだから。

「蘭!頑張れ!」

「6!5!4!」

あと・・・3秒

## #21 「怪我」(後書き)

新一「ひさびさの登場だなあ。」

和葉「そやなあ。」

新一「なんでこの二人なんだ？」

和葉「そやそや。」

新一「作者の気まぐれとか？」

作者「ピンポンww」

二人「気まぐれで出すなっ！」

作者「あはは^^;じゃあいつもので。」

三人「真実はいつも一つ！」

こんにちは、奈津美です。

裕也はもつと早く出す予定でしたが・・・まあいろいろとありまして  
^^;

続編の話も少し考えております。

最近評価が無いんです・・・。

優しいあなた、評価を下さい！

では、次話で会いましょう。

#22 「それぞれの思い」(前書き)

結奈ってなんなんだろう・・・。



## #22 「それぞれの思い」

新一、今日夢で新一に会ったよ。

お花畑の中、私は寝てた。

新一が起こしてくれた時は嬉しかったよ。

私達、どこかで繋がってるんじゃないかって。

結奈ちゃんに、新一は渡さない。

私、新一がいなくなっちゃったら・・・。

心が空っぽになっちゃうよ。

「3」

勝ちたい

「2」

負けたくない

「1」

新一は渡せない！

「ハアアアアア！」

蘭は立ち上がった。

「蘭！」

蘭は新一にピースサインを送った。

「な・・・なんで立ち上がったの？」

「結奈ちゃんと同じだから。」

「えっ・・・？」

「新一が大好きだから。」

「っ！知ってるわよ！」

バシッ

「えっ？」

ガッ

「見てれば分かる！」

バンッ

「新一さんが好きなんだって！」

バンッ

「あの二人、何言ってるのやる？」

「知らん。」

「さあな。」

バシッ

「ずっとずっと新一さんが好きだったんでしょ！」

「結奈ちゃん……。」

ガッ

「結奈は……ぶりっ子だよ。」

あら、自分で言っちゃった。

バンッ

「学校みんなから嫌われてっ！」

ガシッ

「えっ……。」

「結奈に味方なんていないもん！けどこの話し方はやめない！」

「なんで？」

パンッ

「裕也がかわいって言うてくれたから。」

ガッ

「結奈ちゃんは裕也君が好きなんじゃないの!？」

バシッ

「好きだったよ……。」

パシッ

「えっ？」

「ずっと好きだったよ!けど裕也も結奈が嫌いなよ!」

「違う!嫌いなんじゃない!」

「蘭さんに何が分かるのよ!」

「だって、嫌いな子の応援なんてしないでしょ?」

「あっ……。」

裕也、ずっと応援してくれてた。

「結奈ー!頑張れ!」

「けど、結奈が勝ったら新一さんとくっ付きちゃうのに・・・。」

「好きだから応援するの、好きな子だから応援するの。」

「裕也・・・。」

バシッ

「結奈ちゃん、新一は優しいよ。」

ガシッ

「・・・。」

パンッ

「けど、裕也君も優しい人なんじゃないの？」

「・・・。」

）・・・）・・・）・・・

（１０年前）

『やーい！ぶりっ子！』

『自分で自分の事名前ですべて。』

『お前なんかたたいてやるー！』

『やだー！結奈痛いのだー！』

『やめろよ。』

『裕也！』

『結奈の話仕方、かわいいじゃねーか。』

『裕也・・・。』

）。）。）。）。。

「っ・・・。」

涙が溢れてきた。

たとえ嫌われていたとしても

ずっと好きでいるべきだった。

結奈は弱いもん。

そんなこと出来なかった。

裕也、ありがとう。

あなたが応援してくれて

本当に嬉しかった。

「もう、いいよ。」

結奈ちゃんは両手をダランと下げた。

そして

バシッ

「結奈！」

自分から蘭の蹴りに当たりにいった。

バタッ・・・。

結奈ちゃんは倒れた。

防具という仮面の下で

涙を流しながら・・・。

## #22 「それぞれの思い」(後書き)

服部(やばいなあ・・工藤達がかくつついてしもうたら・・)

和葉「なにしとん？平次。」

服部「なんでもあらへん！」

和葉「そうなん？」

服部(はあ・・初恋の人言うべきやろか。)

和葉「じゃあいつものやつ行くか？」

二人「真実はいつも一つ！」

こんにちは、奈津美です。

結奈って本当に分らない子ですね。

新一が好きって言うてたのに裕也が好きなんて・・。

けど、こういう子書いてみたかったので。

もう少しで完結かな？

けど、#30で終わらせるつてのもよくないですか？

キリがいい(・・)b(笑



### #23 「結奈の告白」(前書き)

ファンフィクションのランキングとか  
どうやって見るのか分かりません^^  
;

## #23 「結奈の告白」

「ねーちゃんの勝ちや！」

服部が大きい声で言った。

「やったなあ、蘭ちゃん！」

「ありがとう、結奈ちゃんを保健室に運ばなくちゃ！」

「平気だよ、俺が運ぶ。」

裕也は結奈ちゃんをおぶって保健室に向かった。

「新一、約束守ってね。」

「後でな。」

「蘭ちゃん、ホンマよかったなあ。」

「うん、和葉ちゃんありがとう。」

「蘭、足平気か？」

「ねーちゃん！足腫れとるやんか。」

「平気だよ、保健室でシップ貰うからっ・・・。」

フワッ

「平気じゃねーだろ。」

新一は蘭をお姫様だっこした。

「ちよつと！恥ずかしいからおろしてよ！」

「バーロー、歩かせる訳いかねーだろ。」

二人は保健室向かった。

「そろそろくっ付くなあ、平次約束覚えといてや。」

「あ・・当たり前じゃないか。」

やばいで・・初恋の人なんて言いとお無いんやけど。

平次と和葉は体育館で待っていた。

辺りはすっかり明るくなっていた。

（保健室）

「つ・・裕也？」

「結奈、平気か。」

「大丈夫だよお。」

「俺、結奈のこと・・。」

「裕也、私ね裕也に言いたいことがあるの。」

「えっ？」

「……」

「ねえ、結奈ちゃん達の邪魔しちや悪いんじゃない？」

「それもそーだな。」

「ここで座ってようよ。」

二人は保健室前で座っていた。

「……」

「結奈……裕也のことが好き。」

「はっ!？」

「……」

結奈の頬は赤く染まった。

「お前は新一さんが好きなんじゃないのかよ。」

「裕也がずっと好きだったの!」

「うそつけ! いつもいつも新一さんのことばっか話しやがって!」

「そ・・・それは。」

裕也をあきらめようって思ったからだよ・・・。

新一さんなら私を受け入れてくれるって思ったからだよ・・・。

「俺の気も知らないで、他の男の話しばかりしてんじゃないよー!」

「裕也・・・?」

「俺だって・・・。」

「・・・」

「いい感じだな。」

「うん、そろそろじゃない?」

「・・・」

「俺だって・・・結奈のこと好きだったんだよ!」

「えっ・・・?」

「けど、お前は新一さんのことが。」

「ち・・・違うよお。」

ポロッ

「お前・・・何泣いてんだよ。」

「だって・・・ずっと裕也は私のこと嫌ってるんだって。」

「お、おい。」

「裕也との恋は叶わないって思ったのっ！」

「結奈・・・」

「それなら、裕也を忘れようって思ったの！」

「・・・」

「けど、裕也が応援してくれた時・・・嬉しかったの。」

「えっ。」

「嬉しくて・・・たまなくなっで。」

「ったく・・・相変わらず世話のかかる奴だな。」

ポンポンと結奈の頭を裕也は叩いた。

そして小さな声で言った。

「もう他の奴好きになんじゃねーぞ。」

結奈は耳まで真っ赤にして

「・・・うん。」

涙をこぼしながら笑顔で言った。

「けどさ、お前・・・新一さんのこと。」

「好きだったかもねっ。」

「マ・・・マジ?」

「やだぁ〜焼きもち?」

「ば・・・ばか。」

「けどさ、あの優しい所は好きだったなあ。」

「・・・分かるかも知れない。」

「えっ?」

「あの人・・・優しいしな。」

「見習ってよ。」

「うるせえ。」

ガラッ

「シッ普下さい。」

「新一さん！」

結奈と裕也は声を揃えた。

「おめでと。」

俺は一言そう言って、裕也の頭をくしゃくしゃにした。

そして保健室を後にした。

蘭にシップを貼った後、体育館に行った。

俺達は服部達と家に帰った。

今夜はパーティーだ！



### #23 「結奈の告白」(後書き)

前書きの通り、ランキングとカ知ってる人。  
私にメッセージ下さい。

けど、今パソコンおかしくて返信はできませんが^^；  
誰か、教えてください^^  
後、評価もお願いします。

奈津美

#24 「流れ星に願いを」約束」（前書き）

タイトル微妙だあ・・・。

## #24 「流れ星に願いを」約束」

「かんぱーい！」

工藤家にこだまする明るい声。

「蘭、おめでとう。」

そう、これは蘭の決闘勝利おめでとうパーティーだ。

俺と蘭、服部と和葉ちゃんに博士と宮野と園子に少年探偵団だ。

「コナン・・・じゃなくて新一兄ちゃん、うな重ねーのかよ。」

「元太、相変わらず食べ物の事ばかり考えてんなあ。」

「いいじゃねーかよ。」

コナン。

この名前、もうどれくらい聞いてなかったか。

懐かしいなあ・・・。

俺、あいつらと一緒にいたんだよなあ。

「新一さん、料理すつごくおいしいよっ！」

「ありがとう歩美ちゃん。」

「うーん・・・塩加減が甘いと思いますよ。」

光彦、お前本当に小学生か？

「新一君、カラオケセット持ってきたわよ。」

「サンキュ、元太達歌うか？」

「もちろん！」

曲はもちろん・・・。

）  
）  
）

「仮面ヤイバーかめーんヤイバー！」

のりのりだなあ・・・。

「楽しいよ、新一。」

「そうか？ならよかった。」

「新一も歌ったら？」

「ば、ばーろー！！俺がオンチだって知ってるくせに。」

「園子、なんか入れといてー。」

「あいよっ。」

おいおい・・・俺はいいけど。

みんながどうだか・・・。

知らねーぞ。

「あゝこおおぐあゝれぐあゝでえあいにいゝかあゝわうつたひゝ。」

「ウギヤアアアア。」

悲鳴も工藤家にこだました。

新一には改心の出来だったらしいが。

みんなにはそう思えなかった。

「新一、約束・・・守ってよ。」

「・・・・・・。」

やべえ！告白の言葉考えてねー！

「ああ、じゃあ後で二階に来てくれ。」

「うん。」

だああああー！！どうすればいいんだあー！！！！

「新一君、悩み事？」

「ま、まあな。」

「はっはーん、プロポーズの言葉でも考えてるの？」

「ブッ！」

俺は飲んでたジュースを吹き出した。

「そんなの簡単よ、もうお前を離さないってのはどうかしら？」

おいおい……。

「いいよ、自分で考えるから。」

「そう？」

「工藤君、サンドイッチが無くなってるけど？」

「げっ……宮野。」

「サンドイッチ作ってくれたら嬉しいわ。」

「へいへい。」

「新一も大変じゃなあ。」

「博士も手伝えよ……。」

俺はサンドイッチを作ってからまた歌った。

みんなはもう歌うなっていうけど、俺は結構いけてたと思う。

服部に『歌は俺の勝ちや』って言われた。

9:00にはみんな帰った。

「工藤、頑張りや。」

服部と和葉ちゃんに押されて俺は二階に向かった。

「新一、見て見て！きれいな星空！」

「ああ……。」

「じゃあ早速約束を守ってもらおうかな？」

服部達は隣の部屋で聞き耳を立てている。

「分かった、俺の好きな奴を教えればいいんだろ。」

「うん。」

ドキドキドキドキドキドキドキドキドキ

（やべー……心臓バクバクだぜ。）

~~~~~

「早く言えや、工藤！」

「人のこと言えないやろ。」

「なんや、和葉。」

「本当のことやないか。」

）・）・）・）・）・）・）・

「俺の好きな人は・・・。」

「あ、あのさあ。好きな人の特徴を教えてよ。」

（！！）

「・・・優しくて、意地っ張りでみよーちくりんで。」

「みよーちくりん？」

「ガキの頃から泣き虫な所があつて、今は空手やってて。」

「えっ・・・。」

「小さい頃からずっと好きだったんだ。」

「それ、どうして私に当てはまってるの・・・？」

「好きだからだよ。」



「えっ……？」

「お前のことが世界でいちばん好きだからだよ。」

「う……うそ。」

「お前は誰にも渡さない。」

ポロツポロツ

「……夢？」

「夢じゃないよ。」

「新一……。」

ギュッ

俺は蘭を抱きしめた。

「私も新一が好きだよ……。」

「そっか。」

く……く……く……

「ハッピーエンドだな。」

「ああ。」

「まだキスせえへんの?」

「あの二人はまだとちゃうか?」

「後であのストラップのこと言わなあかなあ。」

「そやな。」

）・）・）・）・）・

「ねえ、新一。」

「なんだ?」

「今日、夢で新一に会ったの。」

（えっ・・・?）

俺は確信した。

二人は同じ夢を見たんだって。

「俺も。」

「えっ?」

「俺も蘭に会ったよ。」

俺達はどこかでつながってるんじゃないかな。

もうずっと前から。

それは服部たちも同じだと思う。

「好きだよ、新一。」

「・・・ばーるー。」

その後、蘭は家に帰った。

服部と和葉ちゃんにいろいろ聞かれた。

疲れた・・・。

けど、俺は蘭に告白したんだよな。

蘭も俺が好きなんだよな。

両思い・・・。

俺は顔を真っ赤にしたまま寝室に向かった

その時

流れ星が流れた。

蘭と一緒にいられるよう

俺は願い事をした。



## #24 「流れ星に願いを」約束」（後書き）

こんにちは、奈津美です。

ファンフィクションランキングは・・・36位でした。

あつ、評価よろしく願いますww

ではでは、次話で会いましょうv（・皿・）v

#25 「あかん」(前書き)

タイトルでだいたい登場人物分かりますよね^^

#25 「あかん」

くっ付いてしもうた・・・。

工藤とねーちゃんがくっ付いてしもうた。

あかん・・・。

和葉に初恋の人教えなあかんやん！

恥ずかしいやないか！

トントン

誰かが俺の部屋をノックした。

俺の部屋って言うても工藤の家やけどな。

「どーぞ。」

ガチャ

「平次・・・。」

「か、和葉！」

あかん・・・約束のこととちゃう・・・？

「あんなあ、怖い夢見たんや・・・。一緒に寝てもいいかな？」

「ええ！」

和葉と一緒に寝るやとおおお！

あかん！

「お願いや……。」

和葉が半泣きだったから

俺はしゃーないからベツトに寝かせた。

「平次の隣は安心や……。」

そういつて和葉は寝てしもうた。

「寝れへん……。」

俺はなぜか眠れんかった。

なんか……ドキドキしたんや。

和葉やのに……。

子分やのに……。

こてっ

「スースー」



俺の背中に和葉の寝息！

あかん、心臓がバクバクいうとる！

「・・・・・・・・アホ。」

俺は和葉の頭をなでてから

寝ようとした・・・。

けど、やっぱり心臓の音がうるさくて眠れへんねや。

俺は、和葉が好きなんやろか・・。

分からへん。

俺はアホや・・・。

ラブラブストラップ・・・二個こつてもうた。

一つは工藤ので、もう一つは分からへん。

ただ、氣いついたらこうてたんや。

俺と和葉は幼なじみや。

そやかて、それだけでもない氣いする。

分からへん。

「ん．．．。」

けど、今はこれでいい。

和葉の寝顔がかわいいから

今日はもう寝よか。

俺は和葉の頭をなでた後

なんとか寝れたんや。

チュンチュン

小鳥の鳴き声が聞こえる．．．。

今、何時やろ．．．。

「ん．．．。」

「へ、平次．．．。」

「和葉．．？」

「．．．近いんやけど。」

気いついたら俺は．．．。

和葉を抱きしめてた。

「な・・・なんでやああああ!!」

「こつちが知りたいわ!」

「なんや・・・俺だけか？」

「ドキドキしてたんわ。」

「あんなあ、平次が近くにいたから息苦しかったんやから。」

「へっ?」

「心臓バクバクやったんよ・・・。」

「和葉も・・・ドキドキ?」

「そっか、ならええわ。」

「俺は下に下りて朝食を食べた。」

「なんか和葉を意識してもうた。」

「あかん・・・。」

「ご飯が喉を通らん。」

「あかん。」

「ん?どうした服部。」

「なんでもあらへん。」

昨日と今朝のことは二人の秘密や。

なっ・・・和葉。

和葉と目が合った時、吹き出してしまった。

「なんだよ、きつたねー。」

工藤の言葉なんか耳に入らへん。

「今日で東京とお別れかあ。」

「そやな、ちよつと寂しいわあ。」

俺達は、和葉と二人で朝食後に帰る仕度をした。

そして、工藤家を後にしたんや。

今度は、工藤たちが大阪に来る番やな。

おっちゃん誘わなあかんし。

じゃあな、工藤。

じゃあな、ねーちゃん。

あつ、ついでにあのきつついねえーちゃんとおてんばねーちゃんと

博士とおっちゃんもじゃあな。

じゃあな、東京。

「平次、はよ行くで。」

「おお、今行く。」

俺は和葉と新幹線に乗った。

電車の中ではちよっときまづいところもあったけど。

楽しかったで。

## #25 「あかん」(後書き)

こんにちは、奈津美です。

なんだか最近忙しいです。

文字数は減らさぬよう、頑張ってますよ。

優しいあなた、評価を下さい。

みんながこの作品をどう思ってるか気になるんで^^

では^^

#26 「毛利蘭」(前書き)

蘭の思いが分かりますよ。

#26 「毛利蘭」

私、新一と両思いなんだよね・・・。

私、新一の彼女になれたんだよね・・・。

嬉しい・・・。

チャラチャラチャチャチャ

「あつ、メールだ。」

和葉ちゃんからだあ。

なになに・・・

『工藤君とくっ付いてよかったなあ。』

私は恥ずかしくて顔が赤くなった。

『ありがとう。』

私はそう返信した。

そっいえば・・・。

さっき、元太君が言ってた。

”コナン”



私も久しぶりにコナンという名を聞いた。

コナン君。

あれは新一だったのに。

けど、なんか。

探偵事務所が寂しい。

コナン君がいなくなっちゃったから。

私には

コナン君も新一も必要だったんだ。

けど、それは無理。

贅沢かな？

新一がいるのにね。

チャラチャラチャチャチャ

「あつ、和葉ちゃんからだ。」

えつと・・・！？

『新一君の告白よかったなあ。』

なんで・・・。

なんで・・・和葉ちゃんが？

知ってるの！！

『なんで知ってるの？』

私は返信した。

コナン君に会いたいなあ・・・。

って、そんなこと無理よね。

ありえないありえない。

けど、志保さんなら。

志保さんならできるかもしれない。

あの、志保さんを殺そうとしてた組織を

コナン君がつぶした後、新一に戻れたのは・・・。

志保さんの薬のおかげだし・・・。

もしかして・・・？

けど、新一は

もうコナンになりたくないよね。

ばかだなあ。

新一と同じくらい

コナン君が好きだったんだ。

存在しない少年なのに・・・。

チャラチャラチャチャチャ

「えつと・・・!？」

『実は・・・隣の部屋で盗み聞きしてたんや。』

「盗み聞き!？」

じゃあ・・・あの会話全部聞かれちゃった!？

恥ずかし～～～～!!

あれ？文章に続きがある。

『園子ちゃんにも教えちゃった。ごめんな蘭ちゃん。』

園子に!？

・・・絶対冷やかされるじゃない。

もう、和葉ちゃんたら。

くすっ

「アハハ。」

蘭は一人で笑ってしまった。

盗み聞きしてた二人を想像したのだ。

「変なの……。」

とりあえず、明日……。

志保さんに聞いてみよう。

無理なら諦める。

私、まだコナン君に

『行ってらっしゃい。』

って言ってない。

『さようなら。』

とも言っていない。

それだけ言えればいいの。

なんか、すつきりしない。

お父さんもそう。

コナン君が居なくなったら

「寂しいな。」

そう言っただけ。

そんなに言うならお母さんとヨリ戻せばいいのに。

歩美ちゃんたちもそう。

「コナン君にはもう会えないんだね。」

「なんだよ、コナン……。」

「お別れくらいしたらいいのに。」

みんな泣きながらそういったもの。

コナン君は

いなきゃいけなかった。

けど、

それは無理。

「ふうー。」

ため息。

なんか、疲れちゃった。

「おやすみ。」

だれもいない部屋に言った。

『おやすみ、蘭ねえちゃん。』

この声が前は聞けたのにね。

寂しい……。

「ばかだなあ、新一がいるのに。」

そう言って私は寝た。

私の頭の中がごちゃごちゃになっていく。

嬉しい。

悲しい。

寂しい。

本当にごちゃごちゃで

疲れてしまった。

けど、明日

新一の顔見たら。

こんな気持ち吹っ飛ぶよね。

## #26 「毛利蘭」(後書き)

こんにちは。

これからはみんなの心情を書きたいと思います。

おもしろいところはないけど

読んでくださいねー^^

評価やアドバイスをどうぞよろしくv(^皿^)  
v



#27 「志保への願い」(前書き)

蘭がとうとう行動に起こしました。

コナンは前から出したかったので^^

#27 「志保への願い」

翌朝・・・。

私は、博士の家に向かった。

志保さんをお願いするために。

ピンポーン

「・・・・・・・・。」

ガチャ

「あら、蘭さん。どういたなの？」

「あのね、志保さんをお願いがあつて来たの。」

「まあ、とにかくあがつて。」

私は、博士の家に入った。

カチャ

「はい、コーヒー。」

「ありがとう。」

私はソファーに腰掛けた。

「あのね、新一を小さくするのって無理かな？」

「それ、本気で言ってるの？」

志保さんは真剣な目つきで私に問いかけた。

「うん。」

「どうして？」

「コナン君にいいたいことがあるの。」

「……………」

志保さんは考えこんだ。

よっぽど危険なんだろうか。

よく分からないけど。

志保さんの表情は決して明るくなかった。

「……分かったわ。」

「えっ？」

「薬を作ってみる。」

「ありがとう!!」

コナン君に会えるんだ。

「ただし、このことは工藤君には内緒ね。」

「・・・うん、分かった。」

内緒にする意味が分からないけど。

コナン君に会えるならそれでいい。

「・・・後ね。」

「なに？」

「私の話、聞いてくれるかしら？」

「うん。」

志保さんの話なんて聞いたことなかったもの。

「私の母はイギリス人のハーフだったわ。」

「へえ・・・。」

どつりで外国人のような顔立ちをしてると思った。

「父と母は私の小さい頃に亡くなったわ。」

志保さんは、つらい思いをしてきたんだね。

だから、自分を出そうとしないのかな。

「姉は、あなた達にあっているのよ。」

「えっと、あの広田さん。」

「宮野明美、私のたった一人の肉親。」

そう、あのジンとかいう男に拳銃で撃たれてしまった。

私の目の前で。

「私を救ってくれたのは江戸川君よ。」

「コナン君が？」

「ええ、どんな時も私をかばってくれたわ。」

やっぱり。

コナン君の存在は

必要だったんだよ。

志保さんにも。

「正直言って、江戸川君を元に戻すか悩んだわ。」

「えっ？」

「江戸川君はいなきゃいけなかったのよ。」

「志保さん……。」

「けど、あなたのためよ。」

「えっ？」

「あなたがいたから、彼を戻した。」

「志保さん……。」

私は博士の家を後にした。

志保さんは三日後に薬をくれると言ってくれた。

私は、新一の家に行った。

「新一、おはよう。」

「ら、蘭！」

「……あのね。」

「なんだ？」

”このことは工藤君には内緒ね”

「な、なんでもない。」

「変なやつ。」

私は新一に抱きついた。

自分でもなんでこんなことしたかは分からない。

ただ、なんかすっきりした。

心が綺麗になっただって感じ。

「ば、ばーろー。」

「・・・ふふふ。」

なんか新一がかわいく見えた。

まるで・・・コナン君みたい。

あっ・・・。

コナン君のこと、忘れようと思ったのに。

志保さんにも頼んじやつたし。

私・・・自分勝手かなあ？





## #27 「志保への願い」(後書き)

新一「おつ、随分久しぶりだったなあ。」

志保「そうね。」

新一「なんでお前なんだよ・・・。」

志保「あら？蘭さんがよかったのかしら？」

新一「っ!!」

志保「あら？顔が真っ赤ねえ。熱でもあるの？」

新一「み〜や〜の〜!!」

作者「次回、小五郎登場です。」

新一「じゃあいつもの決め台詞！」

三人「真実はいつも一つ！」

こんにちは、奈津美ですww

今回は小五郎の思いです。

#35 で終らせたいので、時間稼ぎです(笑

いつも思いつきで書いていて

ここまで来るとは思いませんでした。

みなさん、評価ありがとうございます。

そして、これからも評価のほどをよろしく願いします。

ファンフィクションのランキングは32位になりました。  
みなさんのおかげですv^^^v

では、さようなら^^

#28 「名探偵毛利小五郎」(前書き)

小五郎の思いを書きたかったので書きました。

## #28 「名探偵毛利小五郎」

俺の名前は毛利小五郎。

あの有名な名探偵だ。

まあ、前はコナンが解決してくれてたんだけどな。

コナン。

最初は生意気な小僧だと思った。

ただの居候だと思った。

しかし、急に居なくなってしまふと……。

寂しかったんだ。

俺が、あんな小僧に助けってもらってたなんて認めたくないがな。

けど、あいつのおかげで有名になれて。

いい夢見れたよ。

あの後、俺は頑張ったんだぞ。

事件に関する知識を

本で頑張って調べた。

今まで見落としてた証拠も

見つけられるようになった。

あいつのおかげで

俺は、いつもより胸を張って

「名探偵の毛利小五郎です。」

って言えるようになった。

カチャ

「毛利さん、コーヒーです。」

「おお、梓ちゃん。悪いね。」

「どうしたんですか？ボーっとして。」

「いや、ちょっと考え事をね。」

「そうですね、今日の仕事は何件ですか？」

「えーと・・・五件だな。」

「じゃあ、大忙しですね。さすが名探偵。」

そう、今日も俺は名探偵。

毎日毎日忙しいけど。

結構楽しいんだなあ、こりゃ。

事件解決後のビールもうまいしな。

「ごちそうさん。」

「じゃあ、頑張つて下さいね。」

「ああ、じゃあな梓ちゃん。」

俺はポアロから出た。

外の空気を吸ってから、探偵事務所に入った。

季節は七月。

夏休みの前半だな。

コナンがいなくなってからは、いろいろと変わってしまった。

蘭はあんまり事件にこなくなった。

コナンと一緒にいろんなところにいったな。

あいつ、ひょっこり現れねえかな。

って言っても・・・今は探偵ボウズだもんな。

ありえないことだ。

ただ、あいつの頬をつねってやりたい

あいつを投げ飛ばしてやりたい。

ただ・・・それだけなのに。

ガチャ

「あのー・・・さっき電話した者ですが。」

「こんにちは、どういづご用件でしょう？」

「実は・・・命を狙われているんです。」

「この名探偵毛利小五郎があなたを守ってさしあげましょう。」

今日の日差しは暑くて

眩しかった。

#28 「名探偵毛利小五郎」(後書き)

志保「次回は結奈さんの思いね。」

平次「・・・そやなあ。」

志保「あなたつて、私のこと嫌いなのね。」

平次「嫌いっちゅーより苦手やな。」

志保「あなたには和葉さんがいるしね。」

平次「~~~~~!!」

志保「あら、あなたかわいいところもあるのね。」

平次「誰か助けてやああ!」

作者「じゃあ・・・いつもの決め台詞。」

三人「真実はいつも一つ!」

こんにちは、奈津美です。

明後日辺りに「ライバルは中学生!？」は完結です。  
ストックがたくさんあるので^^

続編も頑張りたいしww

続編も評価もよろしくお願いしますww

今回の話は短めですね。

次回も短いですがww

最初はここまで続くと思いませんでした。  
ちよつと長いですが、みなさんに読んでいただけると  
嬉しいですww

他の作品も読んでくれると嬉しいですww  
では^^





#29 「鈴木園子」(前書き)

園子は好きですww

なんか気取ってないところが^^

今回は短いのですぐに読み終わるかとww

#29 「鈴木園子」

辺りは闇のように暗く。

明かりなんてほとんど無かった。

く・く・く・く・く・く・く・

やっつくつ付いたのねー。

あの二人のゴールインは長かったわあ。

私も見ててじれったかったもの。

それにしても工藤君もやるわねえ。

『お前のことが世界で一番好きなんだよ。』

なんて……。

真さんに言われてみたいわあ。

真さんに……会いたいなあ。

蘭は強かったなあ。

新一君は帰ってくるまでずっとずっと耐えたじゃない。

私にはできないなあ。

ブルルルルル

あら？電話じゃない。

「はい、園子です。」

『園子さん、アジアカップ優勝しました！』

「真さん……？」

『はい、真です。』

「バカ！試合くらい教えてよ！」

『負けるトコ見られたくないので。』

真さんのバカ……。

あなたが負けるわけじゃない。

本当にバカ。

『それと園子さん、暑いからといってお腹を出さないでください。』

……今、出してるけど。

「もちろん、分かってるわよ。」

『では、また。』

「真さん!!」

『なんですか?』

「優勝、おめでとう。」

『ありがとうございます。』

プツッ

ツーツー

「・・・もう、真さんったら。」

私も強くならなっくっちゃ。

今のままじゃだめね。

真さんが日本に帰ってきたら

笑顔で言わなくちゃね。

『おかえりなさい』

ってね。

そうそう、時々メガネのがきんちよが夢に出てくるのよねー。

また、あの顔見たいわぁー。

頬をつねってやりたい。

あーあー今日はなんにもすることないやあー。

「フアゝア」

眠い・・・。

もう夜の１１時じゃない。

そろそろ寝ますか。

夢に真さんが出てくるかも。

夢で会えたら園子幸せ！！

## #29 「鈴木園子」(後書き)

こんにちは、奈津美です。

早く投稿したくてしてしまいましたww

続編を早く書きたいというのもありまして。  
なるべく早く完結させたい気分です^^

#1に比べたら少しは文章が上手くなったかな？  
最初はひどかったぁ^^；

#35で終わります。

エピソードは書きません^^

だって、続編あるし(。・。・)b

次回は結奈の話ですww

結奈の気持ちを分かってあげて下さい。

では、次回会いましょうww

#30 「結奈の思い2」(前書き)

#35 で完結なでもう少しです。

頑張りますので、最後まで読んでください。

### #30 「結奈の思い2」

ごめんなさい。

あなたのことが好きだったのは

本当だから。

信じてね。

く・く・く・く・く・く・く・

まだ日が出ていない。

おそらく4：00くらいだろう。

辺りはまだ暗かった。

保健室で

裕也は言ってくれたの。

「お前は俺が守ってやるから安心しろよ。」

その言葉、信じるよ。

恋って不思議だね。

急に好きになってたりするもん。



結奈、きつと・・・・・・・・。

本気だったんだ。

新一さんのこと

本気で好きだったんだ。

「・・・・・・・・最悪。」

こんなこと考えちゃうなんて……。

結奈には裕也がいて

蘭さんには新一さん。

平次さんには・・・・・・・・和葉さん……（だっけ？）がいる。

恋は、いつのまにかしてるもので。

必ず、叶うとは限らない。

新一さんに……謝りたい。

キスのことと

蘭さんを傷つけたことと

あなたを振り回したこと。

自己中でごめんなさい。

……もう朝だ。

私は朝の道を散歩した。

目が覚めていてもう眠れない。

歩いてればすっきりすると思った。

……蘭さん。

結奈にとって

前も

今も

ライバルだからね。

前は新一さんを巡って。

そして

今は、蘭さんよりもいい恋愛するって決めたの。

蘭さんのライバルは

中学生なんだから。

あなたよりちょっと若いんだからね！

「・・・結奈？」

後ろから

私を呼ぶ優しい声がした。

「・・・裕也？」

「お前、どうしてこんな朝早くにいるんだよ。」

「裕也こそ・・・。」

「俺は、ランニングしてるんだ！」

裕也は帝丹中学のテニス部エースで

みんなから期待されてる。

一度だけ、期待がプレッシャーとなり

試合に負けたことがあった。

けど、まさか

こんな朝早くから練習してるなんて

思いもしなかった。

「・・・裕也は期待されてるよね。」

「なんだよ、いきなり。」

「怖くないの？」

「なにが？」

「みんなに期待されて、もし・・・失敗しちゃったら。」

「結奈・・・。」

みんなが私から離れた理由は他にもある。

そう、あれは

小4の頃・・・。

私は、学校の音楽祭で

ピアノを失敗してしまった。

結奈のクラスは優秀賞が取れず、準優秀賞で終わった。

その時

みんなにひどいことたくさん言われた。

『なんで、失敗したの？』

『お前がこのクラスにいなきゃよかった。』

『・・・結奈にはがっかりだよ。』

次の日

私の周りに

友だちと呼べる存在が消えた。

もう寂しくてどうしようもない時

裕也だけが結奈の味方だったね。

「まだ、あの時のこと・・・？」

「時々・・・夢に出てくる。」

私は、そのことがトラウマとなり

ピアノが弾けなくなった。

泣いた。

泣いた。

泣きじゃくった。

大好きなピアノが弾けなくなった・・・。

それは私にとって

一番つらく

それをなくさめてくれる友だちもない。

「なあ、結奈。」

「な・・・なに？」

「決心がついたらでいいからさ。」

「・・・うん。」

「俺のためにピアノを弾いて欲しい。」

「・・・えっ？」

「また、あの音が聴きたい。」

「裕也・・・。」

「結奈の音を聴きたい。」

ユイナノオト・・・？

「・・・うん。」

「そついえば、新一さんにお礼してねーや。」

「結奈、いいこと思いついたの。」

コシヨコシヨ

「ああ、それはいい！」

「でしょお！結奈、早速練習するね。」

私は家に帰った。

そして、ピアノの前に座った。

新一さんへの思いや

寂しい思いや

蘭さんへの思い

みんなへの思いを

ピアノの鍵盤にぶつけた。

くくくくく

今、この時

一番幸せ。

ピアノが奏でる

この心地よいメロディ

ずっと、このメロディを弾いてたい。

新一さん……。

結奈、もう平気だよ。

パパはいつか帰ってくるって信じてるから。

だから、蘭さんを幸せにしてあげてね。

結奈はこの思いを

ピアノに託す。

そして何時間も弾き続けた。

時がたつのを忘れて。

ママはソファーで

結奈の曲を

泣きながら聴いてくれた。

ママの涙を見たら。

結奈も涙が出てきた。



失恋、寂しさ、失った物

この涙が全部洗い流してくれた・・・。

### #30 「結奈の思い2」(後書き)

新一「なんかさあ、宮野が何か作ってるらしいんだ。」

平次「お前をまたちっこくする薬でも作ってるんとちゃう?」

新一「・・・・・・。」

二人(ありえる!!)

作者「次回はどういう展開になるでしょうかねえ。」

新一「クライマックスだからなあ。」

平次「ほな、いつものやついくで!」

三人「真実はいつも一つ!」

こんにちは、奈津美ですww

実はもう最終話を書きあがっています。

明日完結させるか、明後日完結させるか・・・。

みなさん、評価と一緒に、明日がいいか明後日がいいか決めて下さい^^

ではでは、次回会いましょうww

### #31 「明日」

明日

私は薬をもらつ。

志保さんは薬を作り上げたのかは分からない。

けど、志保さんなら完成できるよ。

みんなも喜ぶよ。

歩美ちゃん

元太くん

光彦くん

お父さん

志保さん

園子・・・？

みんな、みんな

コナンくんを待っている。

私は・・・自分勝手かもしれないけど

コナンくと

少しでいいから話したい。

いろんなことで話したい。

少年探偵団のみんなはコナンくとサッカーしたいって言うてた。

お父さんはコナンくんを投げ飛ばしたいって言うてる。

志保さんを支えたのはコナンくん。

園子は・・・分からない。

早く・・・明日にならないかなあ。

嬉しくて眠れないよ。

「蘭、どうしたんだ？」

「お父さん！」

「ぼーっとしてるからさ。」

「楽しみなんだあ・・・。」

「ああ。」

「お父さん、コナンくんをどう思ってるの？」

「・・・生意気な小僧。」

「もう!」

お父さんって・・・素直じゃないのよ。

お母さんに対しても・・・。

「よし!明日を祝って飲みまくるぞー!」

お調子ものなんだから。

「特別ね。」

お父さんは缶ビール10本飲んだ。

テレビの前で酔いつぶれてた。

「L・O・V・E!ラブラブヨー」

「お父さん!飲みすぎよ!」

「蘭ちゅわん・・・もっと買って来て。」

「お父さん!」

「ぬあゝんどうええすぐあゝ?」

「いい加減にしてよ!」

バシッ

私はついお父さんに回し蹴りをしてしまった。

「ふあゝにほゝえゝ。」

ボタンッ

「お父さん！大丈夫！！」

お父さんは気絶してしまった。

私は、酔い覚ましのトマトジュースを買いに行った。

「もう・・・お父さんったら。」

トマトジュースは自動販売機に売ってないから

私はコンビニまで行った。

）  
）  
）  
）  
）

「あれ？」

もう夜遅いのに

ピアノの音色が耳に入ってきた。

とても素敵な音で

私は音を頼りに

どこから聴こえるのか探した。

「ここって……。」

ピアノの音は佐々岡さんという家から聴こえてきた。

ガラッ

上で窓を開ける音がした。

上を見上げると

「……蘭さん。」

結奈ちゃんがいた。

「蘭さん……家に上がりませんか？」

「結奈ちゃん……じゃあ、遠慮なく。」

結奈ちゃんの家はとても大きくて

中也広々していた。

「蘭さん。」

「あつ、裕也くん。」

「今ね、ピアノの練習してたの。」

「どうして？」

「新一さんに謝りたいの。」

「えっ？」

「謝ってから、このピアノを聴いてもらうの。」

結奈ちゃんは目の下にくまを作っていた。

「このピアノの鍵盤にいろんな思いをこめて弾くの。」

結奈ちゃんは

前より大人になった気がした。

裕也くんも

前より男っぽくなった。

恋は人を変えるんだって

そう思った……。

くくくくく

結奈ちゃんのピアノの音は



明るけれど

寂しさも感じられた。

涙が出そう……。

「結奈ちゃん……。」

「なんですか？」

「明日、新一の家でピアノ演奏してよ。」

「えっ……？」

「明日は……記念日になるから。」

「……は、はあ。」

結奈ちゃんに、明日はコナンに戻る日だって言ったら

驚いてた。

コナンくんことは、新聞で見たことがあるらしい。

新一とコナンくんが同一人物だって聞いて

驚かない人なんていないしね。

その後、もう一回ピアノを聴いて

私は結奈ちゃん家を後にした。

もちろん、トマトジュースは買った。

お父さんに飲ませなくちゃ。

くくく

また聴こえるピアノ。

この音を

コナンくんに聞いて欲しいって思った。

今日の空は

なんだか寂しい色をしてた。

### #31 「明日」(後書き)

こんにちはあ・・・奈津美です。

優しいあなた、評価を下さい。

明日か明後日でこの話が終わります。  
アドバイス下さい。

続編に出して欲しいキャラなども評価と一緒に  
お願いします。

気分が　　の作者です・・・。

新一「元気だせよお。」

蘭「けど・・・かわいそう。評価がいくつか消えてたなんて。」

新一「今日はいつものやめるか。」

蘭「じゃあ、代わりのやつ!」

二人「作者に評価を!」

#32 「小さくなった名探偵」(前書き)

とうとうですよ！

とうとう新一が・・・！？

## #32 「小さくなった名探偵」

翌朝

私は志保さんの家に行った。

薬を受け取るために・・・。

ピンポーン

コナンくんに会えると思うと

嬉しくてじっとしてられなかった。

ガチャ

「あら、朝早いのね。」

「ごめんなさい。」

よく考えたらまだ7：00だった。

「いいのよ、さあ上がつて。」

私は博士の家に入った。

博士はまだ寝てるといふ。

いびきが家に響く。

「これが、幼児化クッキー。チョコチップ入りよ。」

「クッキー？」

「だって、薬の原型のまま工藤くんに渡しても飲んでくれるかわからないわよ。」

「そっかぁ……。」

さすが志保さん……。

「あなたの手作りだって言ったら喜んで食べるわよ。」

「そうかなぁ……。」

「そうよ、さぁ行きなさい。彼の元へ。」

「ありがとう、志保さん。」

「これは私からのプレゼント。」

志保は蘭に箱を渡した。

きれいなラッピングがしてある。

「いいの？」

「ええ、今開けて見なさい。」

私はきれいにラッピングを取った。

つばを飲み込んでから

私は箱を開けた。

「えっ！ど・・・ドレス？」

志保のプレゼントは

純白のドレスだった。

「今日、パーティーでもするんじゃないの？」

「えっ？」

「だって、江戸川君に戻るのよ。」

「・・・するよ。」

結奈ちゃんにピアノを頼んだし。

ケーキも作るつもりだし。

「パーティーって飽きないわね。」

「志保さん・・・。」

「私も参加していいかしら？」

「もちろん！」

「じゃあ、行きなさい。」

「うん！」

私は新一の家に行った。

この薬のタイムリミットは24時間。

一日の間はコナンくんなんだ。

ピンポンピンポンピンポン

ガチャ

「蘭・・・どうしたんだ？こんな朝早く。」

「これ・・・クッキー。手作りなの。」

新一は照れくさそうに頭をかいて

「サンキュ。」

一言言ってから食べてくれた。

「うん、おいしい。」

「本当？」



「ああ・・・。」

ドクン

「ぐっ！」

「新一！！！」

薬は効いているらしく、新一は汗をかいている。

私は新一をベットで寝かせた。

ドクンドクンドクンドクン

（俺・・・どうしちゃったんだ？）

ドクン

「ぐっ・・・。」

ドクン

「うわあああああああああ！！！」

「新一！！！」

こんなに苦しそうな新一・・・久しぶりに見た。

新一は気を失ってしまった。

〕・〕・〕・〕・

ここはどこだ・・・？

そうだ、蘭のクッキーを食べたんだ。

俺・・・どうしちゃったんだ？

「うつ・・・。」

俺は不自然さを感じた。

「あれ・・・？俺、こんなに小さかったわけ？」

俺はベットから降りた。

手が楽に届くはずのドアノブを取るのが精一杯。

俺はとりあえず下に降りた。

「蘭？おい？」

蘭の姿は無かった・・・。

俺は髪を整えようと思い、等身大の鏡を見た。

等身大の鏡がでかくなったのだろうか。

自分が小さくなったみたいだ・・・！！

俺は目をパチクリさせた。

「体が・・・縮んでる!!」

パンツパンツ

クラッカーの音。

自分の頭に紙テープが乗る。

「コナン君、お久しぶり!」

みんなが一斉に隣の部屋から出てきた。

蘭とおっちゃん少年探偵団と博士と宮野と服部と和葉ちゃんと

園子と結奈ちゃんと裕也と父さんと母さん。

「なんで・・・父さんと母さんがいるんだよ。」

「ふふつ、新ちゃんがコナンちゃんになるって聞いたのよ。」

「ごめんなさいね、工藤君。」

「宮野?」

「よお、久しぶりじゃねーかコナン。」

「おっちゃん・・・。」

みんなが”コナン”を待っていたらしい。

「ごめんね、新一。ううん、コナン君。」

「蘭……？」

「私、コナン君がいなくなって寂しかったの。」

「えっ……？」

「みんな、コナン君のこと忘れられなかったの。」

「そうだぜ、コナン！」

「コナン君、バイバイも言わないで新一さんになっちゃうんだもん！」

「そうですよ！」

みんなが言っていることがなんとなく分かった。

つまり、コナンに会いたくなつて

クッキーに薬を入れたんだ。

「新一さん！」

「結奈ちゃん……？」

「結奈、聴いてもらいたいです。」

「？」

「ピアノ借ります。」

結奈は楽譜を開いた。

そして、音を鳴らす。

）  
）  
）  
）

力強い音……。

けど、寂しい音もある。

これは、結奈ちゃんの思いが込められているんだなって思った。

結奈ちゃんの真剣な顔。

蘭や和葉ちゃんや歩美は泣いていた。

この曲は切ない歌だ。

俺はつい聞き入ってしまった。

）  
）

パチパチパチパチパチ

みんなは盛大な拍手を送った。

結奈ちゃんは笑っていた。

俺は結奈ちゃんを見上げた。

「よかったよ。」

「新一さん、ごめんなさい！」

「・・・いいよ。」

「えっ？」

「さっきの曲聴いたからチャラな。」

「新一さん・・・。」

結奈ちゃんは裕也の元へ行った。

「コナン君、久しぶりやなあ。」

俺は、今日だけコナンでいようと思った。

「久しぶり、和葉ねえちゃん。」

少々照れくさかった。

「おおー工藤もちっこくなっただなあー。」

「・・・服部。」

照れくさくもなんともなかった。

ガチャ

「・・・ど、どうかな？」

蘭は純白のドレスを着ていた。

「蘭さん、素敵〜！」

「似合うじゃないか。」

「蘭ちゃん、似合うでー！」

俺は恥ずかしくって蘭を直視出来なかった。

蘭はこっちに向かって歩いてきた。

蘭は綺麗で

まるで・・・花嫁のようだった。

## #32 「小さくなった名探偵」（後書き）

はい、こんにちは奈津美です

なんとかここまで来ました。

メッセージでコナンが出てきて欲しいと言われたため  
出しました。

いきなりコナンが出てきちゃ変なので

話のあらすじを変えて、ここまで来ました。

みなさんの評価がとても嬉しかったです。

そして、これからも評価をよろしく願います。



#33 「少年探偵団」(前書き)

題名が微妙ですね。

読んでくださいww

### #33 「少年探偵団」

蘭が近づいて来た。

なんだろう・・・。

フワッ

(えっ・・・?)

蘭は俺を抱き上げた。

「おかえり・・・コナン君。」

「ただいま・・・蘭ねえちゃん。」

「コナンくん、勝手に居なくなっちゃうんだもん。」

「ごめんなさい。」

蘭は笑って言った。

「このドレス、志保さんがくれたのよ。似合う?」

宮野が・・・?

「に、似合うよ。」

「ありがとう。」

蘭は俺をギュッと抱きしめて

「みんなとサッカーしてきたら？」

って言った。

俺は、今だばだばな服を着てるから無理だと言ったら。

「これ、家からもってきたの。」

蘭はＴシャツとジーンズを俺に渡してくれた。

「行ってきます、蘭ねえちゃん。」

俺は少年探偵団と一緒に公園に行った。

「いやあ・・・久しぶりだなあ。」

「そうだね、お父さん。」

「蘭ちゃん、そのドレス似合うわよ。」

「ありがとう、新一のお母さん。」

「それにしても、小五郎ちゃん。」

「なんだよ、有希ちゃん。」

「まだ、英理ちゃんとヨリ戻してないの？」

新一のお母さんは笑顔で言った。

「なっ……。」

「あんなに仲よかったのにね!。」

「本当ですよー。」

「おい、蘭まで……。」

「毛利さん、素直になっただろうですか?。」

「工藤さん……。」

「そつやで、おっちゃん。」

「お前まで言うな!。」

く公園く

「コナン、行け!。」

元太がコナンにパスをした。

「行くぞ、光彦!。」

バンッ

「ああ!!!。」

光彦はボールを止められなかった。

「いえーい！俺達の大勝利だぜー！！」

「あーあ・・・負けちゃったあ。」

久しぶりだな・・・。

こいつらとこうしてサッカーをするのも。

「コナン君、ちょっといい？」

「あ、ああ。」

歩美は俺を呼んだ。

人目のつかないところに行きたいっていうから

林の中に入った。

ミンミン

セミの鳴き声が鳴り響く

「あのね、私コナン君が好きなの。」

「歩美・・・。」

俺も歩美の気持ちは気づいていた。

とはいいい、断るのはかわいそうだと思ったのだ。

「私達、10歳しか離れてないんだよ!」

(おいおい……。)

「愛に年の差なんて関係ないもん!」

「歩美……。」

「コナン君のこと……好きです。」

「じ……ごめん。」

俺は頭を下げた。

「……なーんてね。」

「へっ?」

「大丈夫、コナン君のこと諦めたから。」

「歩美……。」

「コナン君には蘭さんがいるもの。」

「じめんな。」

「謝らないで、お母さんから聞いたの。」

「へっ？」

「初恋は実らない」と恋は甘くて切ないもの」って！」

（おいおい・・・小学生に教えるものか？）

「なんか、すっきりしちゃった・・・っ・・・っ。」

歩美は急に泣き出した。

「ふえ～～～ん!!」

「おっ・・・おい。」

「ああ～～～ん!!」

「歩美・・・。」

歩美は俺に抱きついて

「どうして、コナン君と新一さんが同じ人なの！」

「歩美・・・。」

「っ・・・ひっくひっくひっく。」

歩美はずっと泣きつづけた。

俺にはどうすることもできず

歩美をギュツと抱きしめてあげた。

せめて、これくらいしてあげようと思った。

「ありがとお．．．」

歩美はそう言い、元太たちのところへ戻った。

「女って……強いな。」

俺もみんなのところに帰ってサッカーをした。

歩美は元気を取り戻していた。

[illegible]

「はあー疲れた・・・。」

「じゃあ、僕・・帰りますね。」

「私も・・・。」

「じゃあな．．．。」

「行くなよ……コナン。」

「そりゃですよー！」

「行かないで……。」



「バーロー。新一の姿でもサッカーくらいしてやるよ。」

三人は笑った。

「バイバイ！」

「ああ、じゃーな！」

俺は家に帰った。

夕日が出ていた。

「ただいまー。」

「あらあゝ新ちゃんたあーだいまあゝ。」

「母さん!？」

母さんはもうすっかり酔いつぶれていた。

「おおゝコナンゝぐえーんきくあゝ？」

「おっちゃん……。」

おっちゃんと母さんが酔いつぶれていた。

「こゝろゝちゅあーん!もあーつと飲むわよおお!」

「このむえいたんてえもゝりこゝろゝ!のおーみむあーす!」

やばい・・・完全に酔ってる。

「お父さん!!」

蘭も大変だなあ・・・。

「そや、おっちゃん。今日、大阪に来てや!」

「ええ?」

「オカンがぜひ来てやって言ってたで。」

「なに! 静華さんが!」

おっ、酔いが覚めた!

「よし! 蘭、コナン、用意しろ!」

「ちょっと、お父さん!」

急だなあ・・・。

まあ、てっちりおいしいからいいか。

ん? この薬ってどれくらいもつんだ?

いちおう新一の服も持っていったほうがいいな。

俺は用意を済ませた。

父さんと母さんは明日帰るらしい。

今日一日はこの家で過ごすといっていた。

服部と和葉ちゃんは蘭に頼まれ来たらしい。

園子はさつき、迎えが来た。

宮野と博士もそろそろ帰るといい帰った。

そして、工藤家には

父さんと母さんを残して

俺は大阪に向かった。

新幹線の窓に映る自分の姿を見たら

思わず笑ってしまった。

俺、今は外見一年生なんだあ・・・って。

服部は、和葉ちゃんにまだ告白してないらしい。

バカだよなあ・・・。

今まで、いろいろあったなあ・・・なんて考えてみた。

「コナン君、そろそろ着くよ。」

「ふにゃ？」

気がついたら俺は寝てた。

前を見たら

服部が和葉ちゃんに肩を貸していた。

服部の顔が赤かったので

俺は笑ってやった。

「和葉、起きろや。もう着いたで。」

「ん・・・平次。」

「ほら、もう止まるで。」

新幹線は止まった。

俺達は新幹線を降りて

服部の家へ向かった。

### #33 「少年探偵団」(後書き)

奈津美です。

あと二話で完結です。

今日完結か明日完結かは、みなさんが決めてください。  
評価と一緒にお願いします。

純白のドレスが前話に出てきました。

これは、続編に活躍するカとww

えっと、他の作品をみなさん読んでくれたらしいです。

「雨上がりの空2」が何気に好評でした。

「雨上がりの空3」も書こうかな(笑

みなさん、あと少しお付き合い下さい。

続編も書き進めています。

もしよかったら、続編も読んで下さいww

#34 「さようなら、コナン君」(前書き)

題名からして話はだいたい分かります。

#34 「さようなら、コナン君」

「おいしーい!」

「うん、すっごくおいしいです。」

「やっぱ、おばちゃんのとっちは最高や。」

「あたりまえやないか。」

「もっと食べて下さい。」

俺達は今、服部の家で”てっちり”をご馳走になつてゐる。

「毛利さん、ほんまに来てくれるとは思いませんでした。」

「いえいえ、静華さんの頼みといえば断るわけありません。」

よくいうぜ。

さっきまで母さんとベロンベロンになつてたっていうのに。

通天閣や大阪城

東京では味わえない風情だ。

「わあー綺麗な満月!」

「そーやろお。」

和葉ちゃんは得意げに言った。

「そや、最近できた”ヒマワリの園” っちゅーのがいいらしいで。」

「ああ、この近く一番のデートスポットや。」

「じゃあ、後で行こうよ。」

「僕も行く。」

俺達は、ヒマワリの園に行くことにした。

）。）。）。）。。

「ほな、行こか。」

なんとかおっちゃんが寝た。

時間はもう11:00

こんな夜遅くだから

デートスポットとはいえ、人はいなかった。

「この先行くとYの道っちゅーのがあんなや。」

「そうなの?」

「そや、途中で二手に分かれてるんや。」



俺達は周りのヒマワリを見た。

「綺麗……。」

月夜にあたるヒマワリも綺麗なもんだ。

「あれがYの道？」

前の方にある、分かれ道。

あれがYの道だろう。

「ほな、俺と和葉は右に行くから。」

「私とコナン君は左ね。」

私達は、このYの道手前で12:00に待ち合わせすることにした。

「ねえ、コナン君。」

「なーに？」

「……怒ってないよね？」

「へっ？」

「だって……小さくなったから。」

「バーロー。俺は嬉しいぜ。久々に蘭を見上げてるんだから。」

「ちょっと、新一。今はコナン君なんだからね。」

「あつ、そうだった。」

蘭とつなぐ手が

いつもより熱かった。

ハアハアと息が切れてきた。

「ねえ、蘭ねえーちゃん。」

「なに？コナン君。」

「新一にいちちゃんのどこが好き？」

「！！」

今はコナンだから

こつという質問もありだよな。

「えっと・・・！！」

「どうしたの？」

「見て・・・。」

目の前にあるのは木でできたベンチとヒマワリ畑だ。

「あそこに座ろうよ。」

俺と蘭はあそこに座った。

「綺麗な夜景……。」

「で、さっきの質問はあ？」

「えっ……つと……。」

ハアハア

また息が切れてきた。

ドクン……。

………

「見て平次！ベンチとヒマワリ畑や！」

「ここがゴールっちゅー訳やな。」

「とりあえず、座るか。」

「ああ。」

俺は和葉の隣に座る。

前はドキドキせーへんかったのに

今じゃドキドキというか……。

トクン……って感じや。

なんか心地ええのや。

「なあ、平次。」

「な、なんや？」

「約束……教えてーな。」

「………分かった。」

もう、しらばづくれるのはよそうと思った。

舌が回らない。

「あ……あ……。」

「なんや？」

「お……俺の初恋の人は……。」

「人は？」

「その前に、その人が歌ってた歌を教えるさかい。」

「分かった。」

「まるたけえびすにおしおいけえ」

(えっ・・・?)

「よめさんろっかくたこにしきい」

「平次・・・その歌。」

「まあ・・・そういつこつちや。」

「平次・・・。」

「け、けど・・・今は子分やで！」

「分かつてる。」

和葉は平次の肩に頭を乗せて歌った。

「まるたけえびすにおしおいけえ　よめさんろっかくたこにしきい」  
「」

平次は笑ってその歌を聴いていた。

く・・・く・・・く・・・く・・・

ドクンドクンドクンドクン

「ぐっ・・・。」

「コナン君！」

「くっ……。」

うそ……明日の7：00あたりまで平気なはずなのに。

『ただ、工藤君は一回幼児化してるから24時間びったりって訳にはいかないかも。』

そうだ……志保さんが言ってた。

どうしよう……。

「ねえ、コナン君。よく聞いてね。」

「あ、ああ。」

俺は、朦朧とした意識の中聞いた。

「私はね、新一の全部が好きよ。」

「ら……んねえーちゃん。」

「新一の推理オタクなところも、やさしいところも鈍いところも。」

「ば……バーロー。」

ドクンドクン

「ぐっ！」

「……いつてらっしやい、コナン君。」

「……らんねーちゃん。」

「さよなら……コナン君。」

「さよなら……らんねーちゃん。」

私は、コナン君にキスをした。

月光は私達を照らした。

コナン君は顔を真っ赤にしながら

目をつむった。

キスが終った後

コナン君は新一になった。

あのキスを見てたのは

月だけだった。

「……」

「ねえーちゃん、大丈夫かあ？」

「蘭ちゃん!？」

二人は、私が約束の12:00になっても来なかったから心配して来てくれたのだろう。

「大丈夫、けどコナン君が新一に戻っちゃった。」  
ベンチで寝ている新一。

「そっか。」

「私、コナン君にいいこと言えた。」

さよなら・・・。

辛いことだけ。

今日のさよならは嬉しかった。

寝てる新一の顔も

明るかった。



### #34 「さようなら、コナン君」(後書き)

こんにちは、奈津美です。

このあと、最終話も更新してしまいます。  
長いようで短い時間でしたね。

コナンは新一に戻りましたね。

最終話はあまり期待しないほうがいいかも^^;

自分で納得できてません。

けど、この終り方でいいと思ったんです。

最終話の後、お知らせを更新しますので  
読んで下さいね。

#35 「ライバルは中学生!？」（前書き）

一応話は完結ですが、お知らせがあるので。  
次のお知らせで一応完結ですww

### #35 「ライバルは中学生!？」

あの後

俺は目が覚めて、服部の家に帰った。

俺と蘭は同じ部屋だった。服部と和葉ちゃんも同じ部屋だ。

蘭と顔を合わせるのが照れくさかったけど

「新一、おかえり。」

蘭がそう言ってくれたら

照れくささとか無くなった。

1：00くらいだっただろうか。

俺達は寝た。

正式に言っと、もっと遅かったかもしれない。

意識しちゃって眠れなかった。

蘭の寝息を聞くと余計眠れない。

蘭の寝顔を見てたら

蘭は誰にも渡したくない。

そう思った。

（三日後）

俺達は東京に帰った。

おっちゃんは

「コナンと旅行ならまだしも、なんでこいつと……。」「  
とかぶつぶつ言っていた。

宮野は

「ありがとう、貴重なデータが得られたわ。」

冷やかな顔でそう言った。

父さんと母さんは箱を残して外国に戻った。

箱にはこう書かれていた。

『服部君たちにあげてね。二人の仲が進展するかもよ。』

俺は今度会うときにでも服部に渡そうと決めた。

服部は人のことばっか言って、自分達は進展しねーし。

鈍い男だぜ。

く・く・く・く・く・

俺は家でのんびりしてた。

蘭はレモンパイを作ってくれている。

ピンポン

「はいはい。」

ガチャ

「こんにちは。」

「結奈ちゃん!」

「蘭さんいます?」

「ああ・・・。」

まさか・・・また決闘?

「結奈ちゃん、何?」

「結奈、蘭さんのライバルです!」

「へっ?」

俺は蘭と同じ反応をした。

「結奈は、あなたに負けません。」

「へっ??」

「空手も負けません、恋愛だって、もっといい恋愛するわ!」

「裕也と?」

「そうです!つまり、蘭さんのライバルは中学生なのです!」

(なのです・・・って。)

「は・・・はぁ・・・。」

「なので、負けませんよ。あなたより若いしね。」

「で、用件はそれだけ?」

「はい!」

チンッ

「なんの音ですかあ?」

「レモンパイが焼けたのよ、結奈ちゃんも食べる?」

「あっ、もって帰ります。」

「ここで食べていったら?」

結奈ちゃんは笑顔で首を振った。

「裕也と食べたいから・・・。」

結奈ちゃんはそう言った。

「はい、レモンパイ。」

「ありがとうございます！蘭さん！今日から・・・いいえ、昔からライバル！」

そう、蘭と結奈ちゃんは出会った頃からライバルだったのかもな。

で、俺もある意味ライバルだったかもな・・・。

「では、さようなら。」

結奈ちゃんは帰った。

「ライバルだって。」

「なっ。」

『アハハハハ。』

二人で笑った日々を

俺は忘れない。

ライバル。

誰にだってこういう存在はいると思う。

ライバルとは

戦いあう存在でもあり

助け合うこともできる存在だと思う。

蘭は

「結奈ちゃん、私なんかとライバルでいいのかな？」

って笑ってた。

「なんかじゃねーよ。」

お前は・・・。

ライバルをけちらせる

最高の彼女だよ。

「ん？なんか言った？」

「いや、このパイおいしいなって。」

「そっか。」



「なあ、蘭。」

「なに？新一。」

「俺もお前の全部が好きだぜ。」

「新一……ありがとう。」

今日の空は

今まで見た空よりも

一番明るく綺麗で

素敵だった……。

く完く



#35 「ライバルは中学生!？」（後書き）

長かったようで、短かった時間。  
さつきも書きました。

時間はお金じゃ買えない。  
それくらい大切なものです。

大切な時間をこの小説に使ってよかったです。  
この小説を忘れません。

評価をお願いします。

次回作にも役立てたいので^^

みなさんの評価をお待ちしています。

2006 9 18 （火） 21:52

# + 1 「お知らせ」(前書き)

微妙にギャグが入ってますww

# + 1 「お知らせ」

こんにちは、新一です。

このライバルは中学生！？はいかがでしたか？

今回の作品を通して、きっと作者も小説の奥深さを知ったでしょう。

まあ、父さんなら分かるかもな。

なんとか蘭に告白できました。

みなさんの応援のおかげです。

えっと、次回作は・・・みんな、もう知ってるよな。

「プリティ園子の恋模様！」

「園子・・・お前どっから出てきたんだよ。」

「ワシの恋物語かのお。」

「博士・・・違うんだけどなあ。」

「志保の研究ノートかしら？」

「・・・宮野。」

だーっ！！

話が続かねえじゃねーか!!

「ライバルは婚約者!？」 (らいばるはフィアンセ!?)

「ええー! 私が主人公じゃないのー!」

「服部と和葉ちゃんだよ!」

「ワシじゃないのかあ!!」

「博士にはフサエさんがいるだろっ!」

「私の話はいけないのかしら?」

「いや・・・その・・・。」

作者が書きにくいだろう・・・。

お前の話は・・・。

「ってことで、新連載は今月中に始まるぜ!」

「俺らの話、見てやってや。」

「服部!？」

「よろしくなあ。」

「和葉ちゃん!？」

なんだかごちゃごちゃになっちまった・・・。

「じゃあ、最後にあの決め台詞言いましょうよ!」

(なんで園子がしきってんだよ・・・。)

「真実はいつも一つ!」

作者です。

これで終わりってのもなんですが^^;

新連載についての希望、ご意見を頂きたかったので^^

ライバルは中学生!?!の評価とともに書き下さい。

）。)。)。)。)。)。)。

空が笑ってくれてるみたいだな。

服部、次はお前の番だぜ・・・。

頑張れよ・・・服部。

お前は鈍感だから

恋に不器用だから

時間はかかるだろう。

けど、いつか気持ちが分かる。

俺らもそうだったから・・・。

な・・・蘭。

「新一？」

「わっ！！」

「どうしたの？ボーっとして。」

「いや・・・なんでもない。」

好き・・・。

この一言が大切だぜ。

和葉ちゃんも頑張れよ。

ふうー・・・。

もう言うことも無くなったな。

これでこの話は終わりだけど。

新連載で、また会おうな。

じゃあな。



眞実はいつも一つ！

く今度こそ完く

# + 1 「お知らせ」(後書き)

これで本当におしまいです。

評価がほしいです。

もう書き残すこともないです。

みなさん、ご愛読ありがとうございました

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8632a/>

---

ライバルは中学生！？

2010年10月21日20時53分発行